人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」ブックレット

新しい地域文化研究の可能性を求めて

2019.3
Vol.8

市民とともに地域を学ぶ
ー日本と台湾にみる地域文化の活用術

人間文化研究機構　広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」
呂理政・黄貞燕・日高真吾・西村慎太郎・呂怡屏・
邱君妮・原田走一郎・葉山茂 著
麻生玲子・葉山茂 編

表紙写真撮影：日髙真吾

2019.3
Vol.8

新しい地域文化研究の可能性を求めて

市民とともに地域を学ぶ
ー日本と台湾にみる地域文化の活用術

人間文化研究機構　広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」
呂理政・黄貞燕・日髙真吾・西村慎太郎・呂怡屏・
邱君妮・原田走一郎・葉山茂 著
麻生玲子・葉山茂 編

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト

「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

新しい地域文化研究の可能性を求めて

挨拶　小池　淳一　2

基調講演　博物館、住民参加と地域振興―台湾における四十年間の観察と考察　呂　理政　4

報告1　「台湾における平埔族の博物館資源活用と文化表象の構築―シラヤ族を事例として」　呂　怡屏　50

報告2　「地域住民とともに『文化遺産』をつくり出す：台湾大渓博物館の事例報告」　邱　君妮　58

報告3　「言語学者を活用する―宮崎県椎葉村と国語研の取り組み―」　原田　走一郎　74

報告4　「被災した家財の資料化作業を通して地域をみつめる―宮城県気仙沼市の事例から」　葉山　茂　88

報告5　「福島第一原子力発電所事故と地域歴史資料の保全・継承」　西村　慎太郎　108

総合討論　「市民とともに地域文化を活用する」
コーディネーター：黄貞燕・日髙真吾
パネリスト：呂怡屏・邱君妮・原田走一郎・葉山茂・西村慎太郎　122

閉会挨拶　木部　暢子　150

本ブックレットは2018年11月10日に開催した国際シンポジウム「市民とともに地域を学ぶ―日本と台湾にみる地域文化の活用術」（主催：人間文化研究機構広領域連携型機関研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」をまとめたものである。研究集金当日の総合司会は中静透（総合地球環境学研究所特任教授）が担当した。

挨拶

小池　淳一（国立歴史民俗博物館　教授）

皆さん、こんにちは。今日は国際シンポジウム「市民とともに地域を学ぶ―日本と台湾にみる地域文化の活用術」に、ようこそお越しいただきました。このシンポジウムは、大学共同利用機関である人間文化研究機構が、日本列島上の地域研究の新たな可能性を追究するプロジェクトの中間的なまとめの意味を込めて企画したものです。機構を構成する五つの機関がそれぞれテーマを掲げ、独自の視点で地域文化の調査と研究に取り組んでいるのですが、それをさらに広く、台湾における地域研究とも比較し、互いに学び合い深め合っていくことを目的としております。

日本と台湾は、隣り合い、互いに影響を与え合ってきた長い歴史を持っております。地質構造の面からも共通する面が少なくなく、地震などの大規模な地殻変動が連動して起こる場合があることはよく知られています。こうした日本と台湾の生活文化を考えるときに、最初から国という大きな枠組みで捉えるのではなく、生活世界が展開する地域を舞台として見つめていくことは、文化の価値や意義を国家の単位ではなく、人々の生活に即して考え展望していく新しい可能性につながっていくものと考えます。

国と国というレベルで文化を考えるときに、私たちは往々にして偏狭な自民族の文化のみを中心に考えたり、あるいは逆に不毛な文化相対主義のひだの中に巻き込まれてしまうことがありま

す。本日のシンポジウムは、そうした従来の比較文化的な見方から距離を置き、あくまでも地域において文化を発見し、活用していく実践的な作業と、そこから得られる知見の共有を目的としたいと考えます。また、地域に生きるさまざまなアクターが関わり合うことで、地域文化が持つ可能性、ポテンシャルがより豊かに膨らんでいくことを確認し、そうした方向性を登録したいと考えています。

そうした意味では、今日のシンポジウムは地域を単位として、文化を比較し、アジア世界の交流を深めていく新たな試みでもあります。長時間にわたるシンポジウムですが、どうか最後までご参加くださいますようお願い申し上げて、開会の挨拶とさせていただきます。どうかよろしくお願いいたします。

博物館、住民参加と地域振興
―台湾における四十年間の観察と考察

呂　理政（国立台湾歴史博物館・前館長）

みなさん、こんにちは。

私は呂理政と申します。三年ほど前まで国立台湾歴史博物館の館長を務めておりました。本日はこの国際シンポジウムに参加できることを非常にうれしく、光栄に思っています。私を東京に招いてくださった主催機関の方々に感謝いたします。今回の講演は「博物館、住民参加と地域振興―台湾における四十年間の観察と考察」というタイトルで、簡単な前置きとまとめ部分を除いた主な内容は二つの部分で構成されます。一つは政治的な文脈の中での台湾の博物館事業、もう一つは地域住民が参加する博物館事業というテーマです。つまり、台湾における博物館事業と四十年間をともにし、その発展の過程に関与してきた私が個人的に観察してきたこと、考えてきたことをここにいる日本のみなさまにお伝えし、参考にしていただきたいと思っています。元々おもに住民の博物館事業への参加についてお話するつもりでしたが、台湾の博物館事業における住民参加は、政府の政策により始まったことなので、政治的な文脈における台湾の博物館事業についてもある程度触れないわけにはいかないと考えた次第です。

今日、この場に台湾からお越しになった黄貞燕博士は私の親しい友人ですが、彼女は今回のテーマについて幅広く関心を寄せ、深く研究を重ね、論述活動を行ってきました。今日の講演でも、黄博士の研究成果や考え方を引用することになりますので、まずここで彼女に感謝を述べておきたいと思います。ただ、私の方が比較的年長で実地経験も長く、若いころから現在まで四十年にわたり台湾における博物館の発展の過程に関わってきたことから、今回、このテーマでお話させていただくことにしました。どうぞよろしくお願いいたします。

一　はじめに：博物館人としての歩み

まず初めに、私個人がこの四十年間、どのように博物館人として歩んできたかをお話しようと思います。私は一九七〇年代に大学を卒業しました。専攻は人類学で、ずっと台湾の民間信仰や民俗に関わる調査、研究を続けていました。一九八三年に中央研究院民族学研究所で博物館の管理業務を担当したことがきっかけとなり、以降、博物館員が本業となりました。そして一九九〇年、国立台湾史前文化博物館の開設に向けた準備作業に加わり、前後して研究・収集部門および展示・教育部門のトップに就任し、一つの国立博物館を立ち上げるという任務に携わることになりました。その後二〇〇一年には故郷の宜蘭へ戻り、宜蘭県立蘭陽博物館の設立準備機関でも主任を務めました。さらに二〇〇

図１　国立台湾歴史博物館

図２　中央研究院民族学研究所博物館

二年には要請を受けて台南へ向かい、国立台湾歴史博物館の設立に携わることとなりました（図1）。この仕事は十二年にわたり続けることになりましたが、その間、設立準備機関のトップを七年間、館長を七年間務めました。二〇一六年に六十五歳で退職し、約三年が経ちました。私の主な経歴はほとんどが国立博物館での業務に関わるものですが、縁あって地方の博物館に関連する業務にも長く関与してきました。故郷の宜蘭に開設された蘭陽博物館もその一つで、私は地元市民や友人とともに「宜蘭博物館ファミリー」を結成し、この地方博物館事業を共同で推進しました。

私の博物館人生の始まりは、中央研究院民族学研究所博物館に配属された一九八三年です（図2）。ここで働いた七年間、民族学の研究も続けましたが、本業は博物館の管理でした。そして一九八九年、教育部から「国立台湾史前文化博物館設立プラン」の作成を依頼された私の恩師、宋文薫教授は、私に同プランをまとめるよう指示しました。その結果、私は一九九〇年より国立台湾史前文化博物館新設に向けた任務に携わることとなりました（図3）。十年にわたる準備期間中、国家の博物館を立ち上げるという任務のため、私はたびたび先進諸国の博物館を視察しました。一九九一年に初めての海外視

図3　国立台湾史前文化博物館

察として日本へやって来たことはよく覚えています。かねてよりあこがれを抱いていた大阪府吹田市の国立民族学博物館と千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館を訪れ、多くを学ぶことができました。後に私が国立台湾歴史博物館の館長を務めた際、幸運にもこの二つの博物館の館長とお会いし、協力と交流を進めることができました。本日は平川南先生、および歴博の久留島館長にお会いできたことを非常にうれしく思います。私が館長時代、交流のため台湾へお招きしたお二人と再会でき、とても喜ばしく感じています。

国立台湾史前文化博物館は考古学博物館です。その設立準備に関わった十年間、同時に私は宜蘭県立蘭陽博物館の設立準備にも関わりました（図4）。宜蘭をふるさとに持つ私は一九九一年に「蘭陽博物館創設の基本構想」を執筆した後、地方における博物館の設立に、どうすれば多くの地元住民に参加してもらうことができるかという問題について、十年にわたり同郷の人々や博物館学者たちと議論を重ねてきていました。後でこの実践をみなさんに紹介したいと思います。

図4　蘭陽博物館（2009年）

また、台湾政府は二〇〇一年に「地方文化館計画」という大きな影響力を持つプロジェクトを立案し、行政院文化建設委員会（文建会、二〇一二年に文化部へ昇格）で行われた議論に私も加わりました。この計画は十六年が経過した現在も進行中で、私は引き続き多くの専門家とともに各地の博物館を訪れ、どうすれば博物館と地元住民を結びつけ、地域の文化や博物館事業を盛り上げることができるかという問題について住民たちと議論を行っています。

二　台湾における政治的文脈の中の博物館

台湾において博物館の事業に地域住民が参加するようになったのは比較的最近のことです。台湾では戦後、権威主義体制の時代が続き、重要なプロジェクトはほぼ全て政府主導で進められました。そのため、まずは政治的な文脈における台湾の博物館事業について少しお話したいと思います。一九八〇年代にある重要な出来事がありました。政府は「文化建設」の名の下、大小様々な博物館を建設するという世界でも珍しいプロジェクトを推進しました。このプロジェクトでは、国家戯劇院や国家音楽庁に加え、五つの国立博物館、さらに二十一県市における図書館や文物展示館、演芸場といった文化施設の建設が提案されました。短期間に大量の博物館や関連施設が建設されるというのは非常に特殊なことです。また、一九九〇年代以降には「社区営造計画（町づくり計画）」と「地方文化館計画」という重要なプロジェクトがスタートし、地域の文化活動や博物館事業にその地域の住民が参加するための道筋を付けました。台湾における今日の博物館の

姿は、こうした四十年間にわたる発展の結果、形作られたものなのです。

1　台湾博物館事業の夜明け

台湾における博物館の発展は日本統治時代（一八九五～一九四五）に始まりました。その時代の代表的な博物館といえば、一九〇八年に創設され、一九一六年に現在の場所に移設された台湾総督府博物館（現在の国立台湾博物館）です。また同時期には一部の大学や研究機関に標本室や文物館が設けられました。

その後、一九四九年に国民党政府とともに台湾へ移された故宮博物院は現在、台湾で最も重要で最も規模の大きい博物館となりました。また一九五五年にはこの時代を代表する博物館として、中華圏の歴史、芸術に関する文物を中心に集めた国立歴史博物館が設立されました。ただ、一九五十年代から六十年代にかけて政府は「反攻大陸」（中国共産党が支配する中国大陸の領土を取り戻すことを目指すスローガン）を国策として掲げ、博物館などの文化事業はそれほど重要視されなかったため、特に目立った発展は見られませんでした。

一九七〇年代になると、台湾は大きな変化の時代を迎えました。一九七一年に国際連合を脱退して国際的な地位が危ぶまれるなど、困難な状況に陥ると、政府は台湾自体の発展を考えるようになり、積極的なインフラ建設を開始しました。この時代、外交上の危機に直面する一方で、台湾固有の文化的アイデンティティを確立する運動が巻き起こりました。そして台湾が経済発展を遂げるにつれ、社会では反権力政治運動が次第に盛り上がりを見せるようになったほか、文化的

には台湾固有の文化資産、例えば民俗、信仰、民間工芸にアイデンティティが見出され、重要視されるようになりました。多くの若い研究者が次々にフィールドワークへ向かい、台湾独自の特色を備えた文化について熱心に考察し始めました。私もその中の一人で、台湾の大衆文化を深く理解しようと一九七〇年代半ばにフィールドへ入りました（図5・図6・図7）。

一九七三年、当時の蔣経国行政院長（首相に相当）が「十大建設」（大規模インフラ整備計画）を発表した後、台湾経済は急激に成長しはじめました。経済が発展すると、次は文化に関心が向くようになりました。そして一九七七年に政府が発案した「文化建設計画」が、現在まで脈々と続く「新博物館運動」を

澎湖花宅集落　安平歐家宅門　金門邱良功墓
台南赤崁楼　馬公天后宮　嘉義王得禄墓

図5　文化資産保存運動（古跡）

雲林東勢　伝統葬式
羅東　旧暦三月三日の東嶽大帝神輿巡行
澎湖　風櫃地区の王爺送り儀礼
鹿港　祭典の前夜巡行
宜蘭　輦轎神輿を通じて神意を伝える
台南　東嶽殿で儀式を執り行う法師

図6　文化資産保存運動（民俗）

巻き起こしました。これにより数多くの博物館が誕生しただけでなく施設としての質も徐々に向上し、文化面でこれまで台湾にはなかった状況を生み出しました。

2　一九八〇年代の新博物館運動

一九七七年に「文化建設計画」が発案された後、新たな国立博物館の建設に向けた準備が始まりました。しかし当時の台湾には大型の博物館を創設するという経験が全くなかったため、一つの国立博物館を完成させるまでに十年以上の年月が必要となりました。こうして建設された博物館のうち、比較的重要なものが自然科学博物館、科学工芸博物館、海洋生物博物館、海洋科技博物館、そして台湾史前文化博物館です。五つの国立博物館の同時建設というのは、今から考えると想像すらできないような出来事です。当時、台湾における博物館に関する専門的な知識と経験はほとんどなく、基礎もできていない状況でした。そんな中で五つの国立博物館を同時に建設するなどということがどうしてできるでしょう?幾多の困難を克服し、チャレンジを繰り返しました。そして私たちはやり遂げたのです。

一九八〇年代から九〇年代、若くして博物館の設立準備に携わった私たちの世代の人間は、次々

図7　1970年代の台湾民間戯曲調査研究

と世界各地の博物館へ視察に出かけました。私の場合、長年にわたり日本の博物館から多くのことを学んだため、この国にとても親しみを感じています。前述の五つの国立博物館は、一九八六年に開館した自然科学博物館を皮切りに二〇〇〇年代にかけて徐々にオープンしていき、最後の海洋科技博物館が開館したのは二〇一四年のことでした。このプロジェクトでは他に、三つの美術館と各県市の文化センター建設が進められました。一九八一年には行政院（内閣と各省庁を併せたものに相当）内に文化事業の管理を担当する文化建設委員会（文建会）が設置され、八二年には文化資産保存法も施行されました。八〇年代を通じて新たな博物館の建設運動が盛り上がったこと、さらに政府内に文化に関する専門機関が設立され、専門的な法律も制定されたことで台湾の文化はそれまでとは全く異なる新たな局面を迎えました。

国立博物館設立の過程における非常に重要な出来事として、自然科学博物館が台湾初の博物館に関する議論を専門に扱った刊行物『博物館学季刊』を一九八七年に出版したことが挙げられます。この刊行物は現在も継続して発行されており、台湾の博物館界にとって最も重要な出版物となっています。また一九九〇年には台湾に博物館学会が創設され、業界におけるコミュニケーション・プラットフォーム

台中　編織博物館

宜蘭　台湾戯劇館

澎湖　海洋資源館

花蓮　石彫博物館

図８　各県市の文化センターの例

となりました。

「文化建設計画」の推進により、地域住民と比較的密接な関係を持つ文化センターが、前後して各県市十八カ所に開設されました（図8）。各文化センターは、図書館、文物館、音楽ホールの機能を揃っていると企画されていました。文化センターの傘下にある文物館は、歴史・文化および産業に関係の深い特色ある資料を取り扱い、戯劇、先住民、寺院や道教廟芸術、伝統家具、竹細工、編み物・織り物、木彫、石刻、陶芸など幅広いテーマを網羅しました。なお、その後推進された「県市主題展示館計画」を通じ、各県市やコミュニティ内にさまざまなテーマを持つ展示施設が三十カ所以上開設されました（図9）。

おそらく公立博物館が数多く開設されたこと、および民間の経済力向上が要因となり、九〇年代には財団法人や個人が運営する小型、中型の博物館が相次いでオープンしました。こうした民営の小型博物館や文物館のテーマとしては、美術、布袋戯（台湾の伝統的人形劇）、服飾、石、凧、茶葉、水晶、宗教、紙、化石、民俗・文物、カメラ、温泉、水道、カニ、酒、映画、ガラス、客家、先住民などが含まれます。

澎湖　開拓館
新竹　映像博物館
花蓮　客家文物館
宜蘭　冬山風箏館

図9　各県市の主題展示館と文物館の例

博物館の数が大幅に増えるに伴い、古蹟や歴史的建築物を再利用した記念館や展示施設も数多く開設されるようになりました。こうした小型施設には、水道、紙、凧、カニ、温泉、映画、ガラスなどが主題として採用された博物館や、特色ある農業やレジャー農業をテーマとする産業文化館、美濃客家文物館（高雄市）や台北二二八紀念館などマイノリティ、弱者の声を伝える施設、町づくりの過程で設置されたコミュニティ型の博物館が含まれます。こうして台湾では博物館の形態が徐々に多様化していき、まさに百家争鳴といった状況となりました。

「文化建設」政策の下、台湾の博物館事業は目覚ましい発展を見せました。国立博物館、省立または市立美術館（三カ所）、特色ある県市立文化センター、地方の小型展示館が相次いで開設されたほか、民営の小型、中型博物館も数多く設置され、多くの人が一緒になって一大ブームを巻き起こしました。一九九〇年代以降に建設、開設された大小さまざまな博物館は二十一世紀に入っても運営が引き継がれており、依然として台湾の博物館界は活気にあふれています。特に注目すべきは地方の博物館と民営博物館の急増です。これは地方と民間に活力が満ち、文化が発展を遂げていることを象徴しています。

3　「社区営造計画」と「地方文化館計画」

台湾政府は「文化建設計画」を推進する過程で、関連する施設や機構の整備のほか、国民の資質を伸ばす必要があると認識し、日本の「町づくり」を参考に一九九四年、「社区総体営造計画」（社区営造計画＝コミュニティ建設計画）を発案しました。地域住民を地域内の公的な問題に関

与させ、コミュニティ文化や共通意識を確立し、生命共同体を形成することを目指すプロジェクトを始動させました。具体的な取り組みとしては、地域の生活環境改善や自然・文化資産の保護から、地域の文化を生かした観光などコミュニティ振興策へと発展していきました。社区営造計画は名称を変えつつ現在も継続されており、依然として文化部の中心的なプロジェクトの一つとなっています。このプロジェクトは民間に文化的エネルギーを育み、文化的な取り組みを生み出すきっかけとなりました。文化的素養を備えた市民が育成されることで台湾が自由で民主的な社会となるよう期待されています。

社区営造計画の提唱者、陳其南教授は「社区営造とは、一定数の人間が一つの『生命共同体』というべき地域の中で生活し、問題に直面すれば話し合いを開き、解決に向けて共同で行動するということ」と述べています。それは一種の理念であり、戦略であり、地域住民の参加を促し、市民社会を形成するための実践的な取り組みと言えるのです。また文建会は社区営造について「コミュニティ共同体の存在と共同体意識の形成を前提かつ目標とし、住民が地域の公的問題に積極関与することでコミュニティ内の共通認識が確立され、地域自らの力で独自の文化的特色を生み出すとともに、コミュニティ内の文化的空間と文化活動を運営するようになること」と定義しています。

社区営造の具体的な内容は、地域住民同士の人間関係構築や福祉、自然資産と環境の保全、文化芸術活動、生涯教育などを通じて自分たちで生活環境および公共スペースを築き上げ、地域経済の振興を図るというものです。

政府主導の「社区営造計画」は大規模かつ積極的に展開され、プロジェクトの対象となったコミュニティは二〇〇一年までに二五八七カ所に上りました。多くの住民がこのプロジェクトに参加し、その理念を実践に移しました。地方では古蹟や歴史的建築物が修復されて再利用され、直接的または間接的にプロジェクトと関わりを持つ小型記念館、文物展示館、コミュニティ・ミュージアム、産業文化館などが数多く開設されました。一九九四年以降、「社区営造計画」は名称を変えつつ現在も続いており、数千のコミュニティが政府からの補助を受けて頑張り続けています。政府にとってこのプロジェクトは、市民社会の構築に向けて地域住民に参加を奨励するという一種の実践的計画なのです。政府主導のプロジェクトとはいえ、機会を得て参加した市民が力を蓄え、国民の文化パワーというべきものへと成長していきました

二十一世紀以降、台湾では新たな博物館の建設と民間の文化的エンパワーメント、また多くの博物館学者が留学から帰国し、新たな力を注入したことで博物館事業はさらに大きな盛り上がりと多様な発展を遂げていきました。こうした中、文建会によって二〇〇一年に「地方文化館計画」（二〇一六年に「博物館および地方文化館発展計画」へと改称）が起草され、二〇〇二年（第一期）、二〇〇八年（第二期）、二〇一五年（第三期）と継続して推進されました。同計画を通じて現在まで十六年にわたり、地方の博物館や文化館関連プロジェクトに毎年約四億台湾元（約十四億五〇〇〇万円）の補助金が支給されており、地方における文化的活力を喚起するとともに博物館や民間の小規模施設を活用した文化事業が展開されています。

二〇〇一年に文建会が提案した「地方文化館計画」構想は、二十世紀の「文化建設計画」を通

じて地方に建設された博物館や展示館と「社区営造計画」を通じて育成された地域住民のエネルギーを結びつけ、地域に文化的拠点を築くことを目指したものです。これにより、革新性と文化的特色、持続可能な運営能力が育てば、多様な文化拠点が形成され、観光資源となると期待されました。

「社区営造計画」の成果が「地方文化館計画」へと引き継がれることで、各県市の特色ある文化センターや各種展示館、郷・鎮（町・村に相当）の既存展示・公演施設、コミュニティ活動スペースが整理され、さらにほとんど使用されていなかった施設に修繕が施されました。そして専門家団体や地方史研究者、パフォーマンスグループによって地域のリソースが統合され、創意と地域の特色にあふれた持続的に運営可能な文化施設（展示、公演施設）へと変わり、台湾の豊かで多様な文化的魅力を体現する地方文化の拠点、さらに観光スポットへと発展し、地域に経済効果をもたらしています。

私個人としては、二〇〇一年に政府内で行われた「地方文化館計画」草案についての議論に加わり、博物館の専門家としての考えを伝えました。博物館人として地方博物館の建設と地域住民が参加する博物館事業に関わってきた私は、博物館の理念と専門技術を活用することで、ローカル・ノレッジ（地方固有の知）を結集してその地域の文化を再発見し、同時にわれわれの文化資産を守ることができると考えました。地域の住民が事業に参加し、行動することで市民社会を形成する力が生まれ、最終的にコミュニティ振興、および都市のプロモーションへとつながるのです。

本計画は二〇〇二年から二〇一五年にかけて推進され、累計約四〇〇カ所の地方施設に補助金が支給されました。こうした施設は大きく展示型、公演型、コミュニティ型の三タイプに分けられ、歴史、芸術、産業、人物をテーマとしたものや公演施設などが含まれます。同計画では、地方の文化資産を保存、再利用して文化的な展示・公演スペースを開設し、公的活動や文化活動への住民参加を促進すること、および文化と博物館の力による地域振興を目指しました。なお同計画には、地方政府、コミュニティの住民、町づくりや博物館の専門家、地方史研究者、パフォーマンスグループなどが加わりました。そして最近では、住民参加によるローカル・ノレッジの収集整理、地域間や異なる分野の施設との協力、文化的な権利の平等、多様な住民の参加といった政策目標が掲げられています。約二十年にわたる計画の推進を通じ、地方の文化と博物館の重要な基礎が確立され、台湾の地域博物館を発展させる上で独自の実践モデルが構築されています。

4　台湾博物館事業の近況

台湾における過去四十年間の博物館運動を振り返ってみると、一九八〇年代に始まった新しい国立博物館の建設は国家レベルの大型博物館建設に関する経験が乏しかったことで多くの人間が欧米や日本など先進国へと視察に派遣され、海外の経験を借用することとなりました。この一連の博物館建設は国際的な視点から得た発想を実践に落とし込む過程だったと言えるでしょう。そして二十一世紀以降、台湾では伝統的な博物館という基礎の上に台湾独自モデルを確立しようという試みが進められ、さまざまな種類の博物館が雨後の竹の子のように出現しました。

一九八〇年代に台湾で博物館の新設運動がスタートして以降、度重なる議論や論争を経て二〇一五年七月にようやく博物館法が施行されました。そして同法施行後、一般調査として博物館数についての統計が取られました。登録作業が不完全だったことから、登録されるべき博物館の実際の数は依然として精査が必要な状況ですが、現時点での暫定的な統計によると、「博物館」の数は一一七館、「潜在的博物館」（日本で言う博物館相当施設）は一三六館の計二五三館となっています。ほかにも多くの「地方文化館」（日本で言う博物館類似施設）も存在します。明確な定義がない上、正式な登録制度も存在しないため、この施設については正確な数を算出することが難しいものの、二〇〇二～二〇一五年の記録によると、文化部の補助金を受給した施設は約四〇〇館とみられます。

統計から見て特徴的なのは、二五三館の博物館のうち六一％が二〇〇一年以降、すなわち二十一世紀になって開館しているということです。当然、これら博物館の多くが九〇年代に設立準備に着手していたとはいえ、台湾では非常に短い間に博物館の数が急激に増えていった跡がうかがえます。また地方の博物館と地方文化館は、規模は小さいものの数が非常に多く、かつ大勢の地域住民が運営に関与していることも、台湾で博物館が発展する上で生まれた特色と言えます。ここ数年、私は海外から台湾を訪れた国際博物館会議のメンバーを各地に案内しましたが、彼らは皆、小さな、特色ある地方文化館の運営に多くの地域住民が関わっていることに驚き、興味深く感じていました。一般的に台湾において大型博物館については十分な基礎が築かれているとは言い難く、海外の著名な博物館とは比べるべくもありません。しかし地方の小さな博物館の場合

は地元住民の多様な創意が反映されており、特別な魅力を備えています。

地方文化館にはコミュニティ型、展示型、公演型が存在しますが、こうした施設は最も地域住民が参加しやすく、主体的に運営を担うことができる可能性も高いため、将来、台湾における博物館事業の重要な特色となると考えられます。

ただ台湾では博物館が急速に増えた後、明確な博物館政策を示す白書、共通のビジョンや使命、専門人材の育成、評価制度、ハイテク導入策が欠けていたほか、博物館の社会貢献が求められるなど、さまざまな課題に直面しました。以下では、博物館事業における住民参加についてさらにお話したいと思います。

三　博物館事業への住民参加

博物館事業に地域住民が参加することに関して中核を占める課題は、博物館と地域住民との間の相互作用的な関係について議論し、実践することにあります。以下ではまず、欧米のコミュニティ・ミュージアムやエコミュージアムについて言及した後、台湾での実践に基づく経験、特に一九九〇年代以降の宜蘭県と北投（台北市）における実践、そして大渓木芸生態博物館（桃園市）と埔里生活生態博物館ネットワーク（南投県）での最近の経験をお話したいと思います。こうした事例を通じ、地域住民が博物館事業にいかに関わったのか、現状はどうか、今後どのようになっていくのかということについて考えていきたいと思います。

1　コミュニティ・ミュージアムとエコミュージアム

一九六〇年代以降、先進国の多くで「知識の殿堂」である伝統的な博物館と社会の間に乖離が生じているのではないか、と考えられるようになりました。このため博物館の社会的役割と価値が見直され、博物館とコミュニティの関係を確立しようという理念の下、コミュニティ・ミュージアムおよびエコミュージアムが議論され、実践に移されるようになりました。

米国の博物館界では一九六〇年代、博物館は収蔵、研究のための施設という伝統的に重視されていた価値観から脱却し、変化する社会に応じて積極的な役割を果たすべきとの意識が芽生えました。そして長年の試行錯誤の結果、コミュニティとの関係を重視する考え方が台頭しました。その後、コミュニティとの間に良質で相互作用的な関係を確立し、その開設と運営がコミュニティ活動の触媒となるようなコミュニティ・ミュージアムが新しい潮流となりました。一九六七年、黒人が多く居住するワシントンD.C.の南東エリアに、米国のスミソニアン協会の支援によって開設されたアナコスティア・コミュニティ・ミュージアムは、その後の運営されるコミュニティ・ミュージアムの先例となりました。

一般にコミュニティ・ミュージアムは地方の小さな博物館がほとんどですが、本来その特徴は規模ではなく性質によって分類されるものです。コミュニティ・ミュージアムにとって最も重視されるのは、地域住民との双方向的な関係であり、住民を中心とする運営規則と目標です。理想的なコミュニティ・ミュージアムとは、地域の住民が共同で創り上げ、共有し、享受される博物館です。そうした博物館では地域住民が立ち上げに関与し、郷土の専門的技術、文物、歴史資料

の収集・展示、運営方針の決定などに加わり、経常的にボランティアスタッフも務めます。コミュニティ・ミュージアムは地域の歴史が蓄積された心の拠り所であり、必ずしも貴重な文物が収蔵されているとは限りません。その地域の民俗・文物、生活資料（文献・写真）が集められることで住民が共有する歴史と感情をつなぐ場となるのです。コミュニティ・ミュージアムは、地域内活動や学習の拠点ともなります。定期的に福祉や教育の普及に関するイベントが開催され、住民の生活品質向上や自主的な学習による成長を促します。

コミュニティ・ミュージアムは従来型博物館の理念を踏襲しつつ、その役割に新たな定義を加えました。そこに収蔵されるのは地域住民自らが保存してきた、住民たち共通の記憶を留める文物が中心となります。研究機関としての機能の専門性は十分ではありませんが、住民を通じて故郷の自然や文化的景観が大切にされていることが理解できます。また展示方法も非常にシンプルですが、コミュニティの記憶を感じ取るには十分です。教育普及活動は地域住民が相互の関係を築くきっかけとなるほか、自ら学ぶ場を提供することにもなります。運営が上手く行った場合、通常なら観光面での成果も挙がり、コミュニティ文化の発展と産業振興を促すことにつながります。コミュニティを重視する考え方を基に博物館と地域との間に良質で双方向的な関係が生まれ、コミュニティ活動の触媒となり得るコミュニティ・ミュージアムの設立と運営が博物館界において大きな潮流となりました。

一方、エコミュージアムという考え方は社会運動に起源を持ちます。一九六八年、フランスの学生たちによって始められた社会改革運動は、従来の中央集権的な権力構造に反発し、「大衆化」、

「平民化」を訴えるものでした。一九七一年、ジョルジュ・アンリ・リビエール、ユーグ・ド・バリーヌといったフランスの博物館学者は、博物館と市民の関係を見つめ直す必要があると主張し、エコミュージアム構想を提唱しました。彼らは地域全体を博物館として捉え、そこに地域住民が参加することで自然と生態系、歴史遺産が生活環境の中に展示され、かつ自然と古蹟の保護、および生活品質の向上という目標も達成されると主張しました。

エコミュージアムの中核的な理念は、博物館と地域住民との関係を再定義し、社会および環境との結びつきにより関心を寄せることで博物館がその社会的責任を十分に果たせるようにすることにあります。住民参加という方策を通じてコミュニティの幸福感を増進し、地域の発展と振興を目指すのです。エコミュージアムはある種、動態的な方法を通じて地域住民の間に共通のビジョンを形成し、その地域の資産の保存、記録、管理を可能とした上でコミュニティの永続的な発展を図るものです。

エコミュージアムは一般に壁のない博物館というイメージで知られ、地域内の中心的な施設と衛星的な施設から構成される形態を取ります。エコミュージアムの範囲は原則としてコミュニティ、村、町、遺跡群、自然保護区、島、または生活文化圏が共通する地域など一定の区域に限られます。そしてこの区域全体が、住民の生活を含めた動態的な博物館となるのです。簡単に言うと、エコミュージアムとはその地域の自然と文化資産を主体とし、住民が運営の主体となる博物館で、住民と自然・文化環境、博物館の三者が相互に作用し合う生活文化圏を意味します。

エコミュージアムの基本的な性質はツールであり、鏡であり、触媒であると言えます。行政と

地域住民が共同で運営するツールであり、住民が自分たちを見つめ、その姿を観光客に映し出して見せる鏡であり、民主化やコミュニティの自治、市民社会を促進する住民運動の触媒でもあるのです。エコミュージアムの中には、人間、自然、時間、空間の全てが含まれます。住民や自然環境を通じてその地域の特徴づけるものを知ることができ、「時間の表現」により過去を理解し、現在を見つめ、未来を展望することができます。また「空間の解釈」により博物館、地域住民、環境の相互作用的な関係が築かれます。エコミュージアムは実験室であり、保存施設であり、学校であり、コミュニティ学習センターでもあるのです。

提唱された当初のエコミュージアムの運営モデルは「ダブル・インプット・システム」と呼ばれ、博物館の運営主体は（1）利用者委員会（User's committee）：社会の各階層、年齢層、マイノリティの代表（住民代表）をメンバーとし、計画の草案策定と成果の評価に当たる（2）科学・技術委員会（Scientific and Technical committee）：博物館員（curators）、専門家、ボランティアをメンバーとし、イベントの指揮、研究計画の監督、保存、保守、展示業務の遂行を担当する（3）管理委員会（Management committee）：スポンサー（地方自治体、民間企業、個人）をメンバーとし、財務と行政上の管理を担う――の三つの委員会で構成されます。この三つの委員会は同じ比率の議席数で構成された役員会を組織し、共同で博物館の運営を管理します。

エコミュージアムに託された理想は高く、原理も複雑だったため、当初は若干の理論的な矛盾や実践上の困難が生じました。特に三つの委員会組織と「ダブル・インプット・システム」の運営コンセプトは、すばらしい発想ではあったものの実際には両立に難しさを伴いました。エコ

ミュージアムは博物館の形態（museum type）として幅広く普及させることに成功したとは言えませんが、博物館の運営において十分に有用な考え方だと言うことはできます。エコミュージアムの考え方は、多くの博物館に部分的なコンセプトとして採用され、成果を挙げています。

現在、世界の約三〇〇カ所でエコミュージアムが運営されており、うち二〇〇カ所が欧州、さらにその大部分がフランス、イタリア、スペイン、ポーランドに集中しています。世界中でエコミュージアムが増えるに伴い、その理念もより豊かなものとなっており、こうした変化は、参加するさまざまなソーシャルグループへのフィードバックや相互作用にも反映されています。イタリア、ポーランド、チェコ、トルコといった国でエコミュージアムが急速に増えているほか、インド、中国、台湾、日本、タイ、ベトナム、カンボジアなどアジア各地でも「エコミュージアム学」が徐々に注目を集めるようになっています。エコミュージアムを媒介として、コミュニティは地域の資産をしっかりと把握し、より有効活用することができるようになり、さらに地域の特色を保存する新たな方法が提示されるのです。

2　一九九〇年代以降の経験：宜蘭と北投、その他の事例

一九八〇年代に台湾で起きた新博物館運動は政府主導のものであったものの、国家レベルの博物館を建設することによって育成された次世代の人材は欧米の思想の流れを受け入れ、博物館に関する伝統的な知識と技術を吸収して任務に当たりました。同時に一九九〇年代以降は、コミュニティ・ミュージアムやエコミュージアムといったテーマに注目し、台湾における実践を検討し始

めました。

宜蘭県では一九八九年、頭城鎮の烏石港遺跡公園に博物館を建設する計画が地元関係者から提案されました。委託を受けた私は一九九一年八月に「博物館建設基本構想」を作成。一方、県政府は建設準備委員会を設置し、博物館の名称を「蘭陽博物館」と決定しました。そして一九九四年に「総体プラン」、一九九六年に「ハード・ソフトウエア設計計画」が作成されました。計画が動き出す中、各分野の専門家が何度も会議を開き、博物館学に関わるテーマや蘭陽博物館の具体的な内容について討論を重ねました。そのうち最も有意義だったのはエコミュージアムとコミュニティ・ミュージアムについての議論で、宜蘭における実現の可能性が話し合われました。

私は一九九三年に初めてエコミュージアムに関する著作物を目にしました。このため、蘭陽博物館の建設計画に参加した際、住民が参加する博物館を建設し、地域を振興するための「ツール」としてエコミュージアムのコンセプトを取り入れたいと考えました。しかしエコミュージアムの原則は非常に複雑で、一部抽象

図10　宜蘭是一座博物館

的な概念も含まれおり、運営モデルを実践に移すには困難が伴いました。また世界各地の社会情勢も異なることから、私は自らのルーツに立ち返るべきと判断し、台湾独自の運営モデルを築き上げようと考えました。一九九七年、欧州でのエコミュージアム視察の旅から帰った私は、蘭陽博物館建設に向けた仮説、目標として「宜蘭は一つの博物館（Yilan as a living museum）」というテーマを掲げました（図10）。これは宜蘭全域を、自然・文化環境と地域住民が共生、相互に作用し合う一つの博物館としたいという願いを込めたものでした。

故郷とは多くの人が夢を抱くことができるすばらしい場所だと私は考えています。「宜蘭は一つの博物館」というテーマはロマンチックな響きを持ちますが、私にとっては宜蘭全体が博物館の敷地であり、保存、収集・研究、展示・教育といった具体的なプランを実現するための仮説です。またこのテーマは任務に当たっての目標でもありました。過去二十年にわたる宜蘭の「文化経験」を基に民間のリソースおよび力を結集して文化的環境を醸成するとともに、自然資産と文化資産保護の理念を掲げ、地域の自然と文化を共に守っていくため、具体的な計画を推進することを目指しました。

一九九九年、蘭陽博物館の建設計画が始動しました。私は宜蘭における博物館事業を発展させるための先行計画として「宜蘭博物館ファミリー設置計画」を提出し、これによりこの地域に特殊な博物館を構築するための試行錯誤が始まりました。蘭陽博物館のほか、地域の小規模施設、地元の財団、コミュニティ、学校を含めた「博物館ファミリー」のメンバーは、共同で視察会や研究会、講習会といった学習イベントを開催するようになり、宜蘭における現在の博物館運動に

つながりました。

二〇〇一年一月、私は蘭陽博物館創設準備所の主任に就任し、同年五月にはビジョンを共にするパートナーを集めた「宜蘭県博物館ファミリー協会」を設立しました。同協会は宜蘭県の公立博物館、コミュニティ内の文化館、文化または産業関連団体をメンバーとし、宜蘭の博物館事業を共同推進することを創設の主旨に掲げました。民間団体の宜蘭博物館ファミリー協会は現在まで十八年にわたり継続して運営されており、その規模も団体メンバー（大小の各種施設）三十六施設、個人メンバー十六人まで拡大しました。中でも最も規模が大きく、宜蘭県における博物館事業発展計画の策定を担う蘭陽博物館は二〇一八年、過去二十年間の事業成果をまとめ、県政府各部署が一丸となって文化事業の長期的発展を図る「宜蘭博物館総体建設」計画の推進を提案しました。

一九九〇年代に始動したエコミュージアムのもう一つの事例は「北投温泉生活生態博物園区」です。古くから温泉地としてその名を知られる台北市北投区では、一九九四年に北投公共浴場跡が発見され、その修復を通じて地域住民による町づくりが始動しました。住民と専門家、政府の間で長年にわたり対話と努力が重ねられた結果、同施設の修復と温泉博物館の開設が決定したのです。そして一九九六年に専門家を通じてエコミュージアムの考えが導入され、「北投生活環境博物園区」というコンセプトが生まれました。一九九八年に北投公共浴場の修復が完了し、台北市文化局が管理・運営を担い、地域住民が教育活動やガイドなどのボランティアを務める「北投温泉博物館」がオープンしました。博物館と地域住民の間に良好な相互作用的関係の基礎が築か

れるとともに、温泉博物館を中心として北投区の広い範囲にまたがる「北投生活環境博物園区」構想がスタートしました。

以来二十年、温泉博物館と多くの地元民間団体は構想の実現に向けた努力を続けてきました。しかし、具体的な取りまとめ組織が存在しないことや、シンプルで明確なビジョン・使命、全体的な青写真が示されなかったことから抽象的な議論にとどまり、目に見える成果は現れていません。ただ近年、北投では精力的に活動する市民団体が数多く出現し、こうした団体に加わる若い世代も増えており、地域の自然環境や歴史、文化の調査、保護が継続して進められています。さらに行政からのリソースも注入され、北投に新たな希望が生まれています。こうした中、市政府と地元市民団体が「北投生態博物園区」の実現に向けた青写真の作成を計画しています。

「北投生活環境博物園区」構想を深く考察してきた黄貞燕博士はその意義について、地域の歴史・文化の発掘、活用に住民の参加を奨励することで生活が豊かになり、環境が改善され、地域の主体性とアイデンティティの確立を促すことにあるとの認識を示しています。さらにこの構想は、地域に関連のある産業の創出と発展にも寄与するほか、政府や非政府組織（ＮＧＯ）、民間のリソース統合を促進して地域の公共問題を提起したり、交流や議論を行う場を提供したりすることになるため、市民社会の実現に向けて大きな意味を持つと指摘します。

黄博士は博物館学の手法を地域の文化事業に活用する場合のメリットとして、博物館は絶えず再生産を繰り返すメカニズムを有すること、多様な展示（記録）方式を備えること、さまざまな人間が交流し、対話する場となること、リソースの統合メカニズムを備えること、長期にわたる

柔軟性を持つ事業であること、といった点を挙げています。博士はまた、地域住民参加の下、「北投学」を中核とする博物館を立ち上げてコミュニティのリソースを分かち合うプラットフォームを構想したり、「北投散策」というアクションプランを計画したりするなど、「北投生活環境博物園区」の理念を実践する具体的なアイデアを提案し、試験的に実行しています。こうした計画は現在も進行中で、今後の見通しに期待が持てそうです。

台湾には他にもエコミュージアムの理念を実践している地域がいくつか存在します。新北市立十三行博物館は一九八九年に発掘された遺跡を展示する考古学博物館で、二〇〇三年にオープンしました（図11）。本来は十三行博物館を中心として周辺の遺跡や古蹟、自然保護区、河岸の生態系、歴史・民俗、産業文化など多様なリソースを統合、連携させ、淡水河の河口域西岸エリア全体を「淡水和八里左岸文化生態園区」とし、「河岸、コミュニティ、博物館」を含む総合的なエコミュージアムを整備する計画でした。しかし地元市民団体の力不足もあって地域住民の参加意欲は低く、共通認識が形成されておらず、博物館と住民との話し合いも平行線をたどっており、今後一層の努力が求められます。

図11　新北市立十三行博物館

新北市瑞芳区には水湳洞、金瓜石、九份といった、かつて鉱業が盛んだった地域が存在します。金瓜石は約一〇〇年にわたり隆盛を極めた金山の町で、かつての人口は一万人に達していました。二〇〇四年に開設された黄金博物館は、エコミュージアムの理念を基に運営され、コミュニティと協力して地域内の特殊な自然・生態、鉱業に関する歴史的遺産、集落の文化的景観を完全に保護しています（図12）。目標は鉱業に関する文化的遺産を保存し、地域の観光業振興につなげることです。

黄金博物館は鉱山跡地を利用した博物館ですが、エリア内には多くの住民が暮らしています。エコミュージアムを運営する際に直面する問題は、豊富なリソースを持つ行政と力の弱い住民との間では対等なコミュニケーションが築けないということにあります。

これまで見てきた事例は、公的リソースを後ろ盾とする地方の博物館によって推進されものですが、これからご紹介するのは地域住民が町づくりをきっかけにエコミュージアム整備計画を始動させた珍しいケースです。

南投県埔里鎮・桃米地区は台湾において町づくりに成功した好例の一つと言えます。同地区は

図12　新北市瑞芳区の黄金博物館

一九九九年九月二十一日に発生した台湾中部大地震（九二一大地震）の被災地に位置するコミュニティです。震災後、この地区には故郷を復興させ「桃米生態村」として整備し、埔里鎮を「チョウの王国」にすることを目指す組織「新故郷文教基金会」が設立されました。そして二〇〇一年より、桃米地区を中心として地域の博物館事業を展開するというアイデアについて議論を重ね、二〇一六年に埔里鎮全域を「埔里生活生態博物館ネットワーク」に設定し、住民参加による町づくり運動を展開するという計画が提案されました。

計画の発起人および共同推進役は、新故郷文教基金会と国立暨南国際大学、埔里観光協会が務めました。当初の主旨は、埔里鎮の生活、生態系、産業、芸術のすばらしさを売りにした文化的な町づくり運動を展開し、本格的なエコ・文化ツーリズムを発展させることでした。その目的は幸せで親しみの持てる居住・生活環境を追求し、埔里鎮の公的な問題に地域住民の関心を集めて行動を起こさせ、全体的な生活の質を引き上げることでした。

この計画の発起団体の一つ、新故郷文教基金会は非常に行動力のある財団であり、桃米地区におけるコミュニティ建設の成功経験を基に、さらに大きな規模の町づくり運動を推し進め、この地に新たなパラダイムを確立する可能性があります。これまでにエコミュージアムは社会運動の触媒ともなるとお話したように、住民が自分たちの住む地域を住みやすい環境へと変えたり、公共問題に取り組んで生活全体の質を高める社会運動を引き起こすことも可能なのです。基本的に地域住民の中から生まれたこの計画は今も積極的に推進されており、近い将来その成果を目にすることができると期待されます。

3　大渓での経験：大渓木芸生態博物館

桃園市大渓区は一〇五平方キロメートルの面積と十万人近い人口を持つ地域です。十八世紀後半にここへ移住した漢民族が大嵙崁渓（現在の大漢渓）の河岸段丘を開墾し、月眉地区で稲作を開始しました。一八六〇年に台湾で外部との通商が始まると、大嵙崁渓による水運の便に恵まれた大渓は木材や樟脳、茶葉といった産物が集散する重要な商業拠点となりました。しかし、一九一六年になると大嵙崁渓の水量不足から水運事業が停止され、その後、かつて繁栄を経験した大

図13　大渓の「牌楼立面」レリーフ

図14　大渓の古い町並み

渓は徐々に古い町並みを売り物にする観光地へと変わっていきました。一九九四年、町の古い「牌楼立面」（バロック様式の建物と上部にほどこされたレリーフ）の保存を目指す町づくり運動が始動し、約二十年にわたり取り組みが続けられました（図13・図14）。そして二〇一二年に文化資産の保存と住民たちによる町づくり運動を結びつけた博物館の設置が議論され、行政と専門家、地域住民の間で幾度となく話し合いが進められた結果、二〇一五年に大渓木芸生態博物館が設立されました（図15）。博物館は、住民参加を促し、共に学び、行動することを基本理念とします。博物館の知識と技術を通じ、地域住民と共同で文化資産を保護し、ローカル・ノレッジを収集整理することで大渓で暮らす魅力を高め、産業の振興を図り、地域全体を住みやすく、旅行にも適した生活博物館へと発展させることが期待されます。

大渓木芸生態博物館も、地域住民の参加による共学、行動の実践により地域の振興を図ることを基本理念とします。その戦略は、文化遺産を博物館の展示・公演スペース、地域住民の生活やローカル・ノレッジをコンテンツとし、住民が博物館の主として共同で運営に当たるというものです。近年の重要なプロジェクトに

は（1）古蹟および歴史的建築物の修復・再利用計画（2）大渓の木工芸術と庶民生活に関する調査研究計画（3）「大渓学」の確立（住民参加によりローカル・ノレッジを共同で記録する）（4）木工ライフ普及計画（木工芸術産業振興に向けた方策を探る）（5）「街角館」計画（共に学ぶパートナー団体を立ち上げ、協力して魅力ある地元生活を創出する）――などが挙げられます。

大渓木芸生態博物館としては現在、公営の六施設を運営すると同時に（図16）、店舗などを利用して住民が展示スペースなどを開設する「街角館」の支援計画を進めており、既に二十八カ所が設置されています。博物館プロジェクトを通じて地域住民が共に学び、成長し、能力を高めて大渓木芸生態博物館の共同運営に取り組んでほしいものです。

ここ二年間、私は何度か大渓で街角館を運営する住民たちと議論し、彼らが地域のためにしたいことについて共に考えたことがあります。以下に、彼らが望むことの一部を紹介します。木工工芸品工房「三和木芸工作坊」を運営する林治謙さんは、ブランド化された木工教室を広めるとともにコミュニティ内に助け合いのシステムを確立し、内柵（大渓区西部の伝統的な呼称）に多元的な生活エリアを築きたいと語ります。豆干（豆腐を乾燥させた食材）の老舗店「大房豆干」の黄淑媛さんは家族の事業文化を継承し、アイデア料理でみんなに豆干のことを思い出させたいそうです。旅館「中和旅社」の経営者、許黄海さんは陣頭（お祭りなど台湾の民俗行事の際に行われる楽器演奏、踊り、パレードなどのパフォーマンス）文化をテーマに取り上げ、大渓の多様性あふれる魅力を伝えるとともに、低価格で親しみやすい若者向け旅館を営んでいきたいと話しました。香港から大渓に嫁いできた女性は、夫とともに社会的企業「寺日工作室」を創業。彼女

は地域の社会的弱者、セカンドキャリアを望む女性などを雇用し、古着を新たなデザインで仕立て直す事業を進めたいといいます。地方で新しい産業を起こし、過剰な廃棄衣類が引き起こす環境問題の解決につなげたいそうです。「桜桃音楽館」の江子瑛さんは、自分のことを「大渓の音の収集者」と語ります。大渓をテーマとするすばらしい音を生み出し、聞く者に生命力を感じさせ、感動を与えたいといいます。

私はかつて二〇〇八年に大阪市中央区平野町にある小さな博物館を訪れ、創設者であるお寺の住職から、同町に開設された数多くのミニ博物館についてお話を聞き、大変興味を覚え、そこから多くのインスピレーションを得ました。

4　住民参加によるローカル・ノレッジの収集整理と地域学

住民参加によるローカル・ノレッジの収集整理と地域学というテーマは、どちらかといえば専門家が関心を持つ問題です。これまで述べたように、一九七〇～八〇年代の台湾では文化的アイデンティティの確立と文化資産の保存運動が急激な盛り上がりを見せました。一九九八年には専門家によって「大家来写村史（みんなで村の歴史を記そう）」プロジェクトが提案され、地方の歴史研究者や住民が自分たちの村落の歴史を記録するようになりました。このプロジェクトに参加した歴史研究家は、大衆史学（popular history）や公共歴史学（public history）について議論を開始し、その後「台湾大百科全書計画」、「国民記憶庫－台湾故事島」、「国家文化記憶庫」といったプロジェクトが政府に提案されました。こうしたプロジェクトはいずれも重要な理念として

「ローカル・ノレッジの収集整理」や「市民と共に歴史を記録する」を掲げました。以下に、これらプロジェクトについて簡単に説明します。

一九九八年に台湾省政府文化処と社区営造協会が、呉密察教授主導による「大家来写村史」プロジェクトを計画しました。基本理念は、市民が自分たちのふるさとの歴史を自ら記述するというもので、コミュニティの人間関係を構築し、地元文化に対する自覚を持ち、アイデンティティを確立することを目標としました。こうした村落史は絶えず発言の主体が変わる歴史記述であり、時代や注釈者によって異なる歴史的意義が出現します。村落史の記録は文書に限らず、絵画、写真、録音・録画、展示、パフォーマンスなど記憶を呼び戻して表現することができる、さまざまな方式が取られます。このプロジェクトが大規模に継続されることはありませんでしたが、歴史学界に考察と議論を引き起こしました。

このプロジェクトに参加した周樑楷教授は大衆史学（popular history）に関する3原則、（1）大衆の歴史を記す（of the people）（2）大衆のために歴史を記す（for the people）（3）大衆によって記される（by the people）――を提唱しました。大衆史学の表現形式は文字に加え、口伝、映像、デジタル記録、マルチメディアなど多岐にわたり、さまざまなバージョンの歴史が存在することになります。こうしたテーマを扱う分野を学術界では近年、公共歴史学（public history）と呼ぶようになっています。通常、専門的な歴史研究者の大多数は国史の観点に基づき、「大きな物語（grand narrative）」形式の通史を採用します。みんなで共に歴史を記述するという行為の中には、歴史的な意義に加え、個々の生命、社会に関わる意義も溶け込んでおり、かつ、絶え

間なくブラッシュアップが行われます。台湾の歴史学界において公共歴史学は、現在も重要なテーマであり続けています。

二〇〇五年、文建会で主任委員を務めていた陳其南教授は、専門家版とインターネット版を含む「台湾大百科全書」編纂計画を提案しました。うちインターネット版は市民と共同で編纂する百科全書とし、全国民にネットを通じた編集を開放するという画期的な方法を採用しました。ただ残念ながら、政策の変化やウェブサイトのシステム変更、および著作権や記述内容の正確性といった問題から、当初見込まれていた成果は挙げられず、二〇一四年にサイトは閉鎖され、データは文化部の「国家文化データベース」に統合されました。このプロジェクトが成功することはありませんでしたが、市民の間にインターネットを通じて記録を残そうという気運を高めました。

二〇一三年、当時の龍応台文化部長は「国民記憶庫－台湾故事島」プロジェクトを提案しました。著名な作家でもある龍氏は「台湾市民が口述する人生経験を系統立てて収集し、全市民が個人的な記憶や物語を分かち合うことで、国民の求心力と、台湾という土地に対し共通して持つ愛着を結びつけるほか、小さな物語が結集することにより国家の歴史が立ち現れる」と説明しました。台湾の歴史は多くのエスニックグループ（族群）が融合していく過程でもあり、それぞれのグループが有する全く異なるライフヒストリーが多様で複雑な社会文化と感情を生み出しています。「台湾故事島」は異なる世代や異なるエスニックグループの物語が交差するプラットフォームです。社会的弱者や文字記述に不慣れな者に配慮し、口述形式を採用することで歴史編纂の裾野を広げ、公平性の確保につなげました。政府の資料、学者の記録、歴史家の記録も全て歴史で

すが、国民の口述による歴史こそ最も真実に迫るものです。誰もが自分の物語を有しており、これら物語をパズルのように寄せ集めたものこそが「国民記憶庫」であり、真の〝国史〟となるのです。

プロジェクトを通じて開設された「台湾故事島」のサイトには誰でも自分の物語を投稿することができます。また各県市に物語収集拠点が五十カ所以上設けられていたほか、遠隔地に巡回して物語を収集する事業「故事行動列車」も行っていました。このプロジェクトの発想はすばらしいものでしたが、龍部長の退任後、中断してしまいました。

二〇一六年五月に就任した鄭麗君文化部長は、ハイテクを利用した国家レベルの文化プラットフォームを構築する「国家文化記憶庫」計画を提案しました。この計画は、土地と人に関する共同記憶の保存・再現、市民参加によるローカル・ノレッジの収集整理によりクリエイティブ産業の基礎を構築し、台湾のオリジナルな文化を世界に向けて発信することを目標に掲げました。

ローカル・ノレッジに基づく各種歴史記述の形式には、文字、画像、音声、映像などが存在し、その記述内容には地方史、芸術史、建築史、生活史、社会史、エスニックグループ史、生態自然史、産業史、組織史などが含まれます。地域住民が自らの解釈で歴史の編纂に加わり、共同でローカル・ノレッジの収集整理を推し進めるのです。「国家文化記憶庫」の資料はデジタル化してオープンにされ、文化研究、教育、産業、観光の付加価値向上に活用されます。このプロジェクトは、政府が二〇一七～二四年の八年間に二二億七〇〇〇万台湾元の予算を計上し、現在大々的に推進されてします。このため「ローカル・ノレッジの収集整理」および「市民による歴史の共同編纂」

が文化の発展における重要なテーマとなっています。

私が務めた国立台湾歴史博物館は、二〇一一年に台南市安南区でオープンしました。オープン後、私は「大家来写村史」プロジェクトと公共歴史学の理念が当博物館の使命に近いとの認識を基に「博物館歴史学」というテーマを掲げました。これは博物館から民衆の歴史を構築したいという考えから出た新しいアイデアで、当館の謝仕淵博士(現・台湾歴史博物館副館長）にこのテーマを発展させるよう要請しました。

台湾歴史博物館は「台湾人全体の歴史博物館」となり、特に大衆や庶民の生活文化に焦点を当てた研究および展示を行い、政府からの視点ではなく、大衆の視点から見た台湾の歴史解釈を提示したいと考えています。社会運動や個人のライフヒストリー、大衆の生活などが全て台湾歴史博物館の研究、展示の対象に含まれます。また博物館は庶民の体験や人生の細部について観察を行い、研究を通じてこれまでの歴史書には記載されてこなかった物語やその役割を再発見し、展示を通じて市民に提示するとともに、大衆史の構築にとって良質なコミュニケーション・プラットフォームを提供することが可能です。

ここにご出席されている黄貞燕博士もこのテーマに強い関心を寄せており、国立台北芸術大学博物館研究所主催による「博物館歴史学」という名称のシリーズフォーラムを台湾歴史博物館の謝仕淵副館長と共同で手がけていらっしゃいます（図17）。このフォーラムには国立台湾歴史博物館、宜蘭県立蘭陽博物館、桃園市立大大溪木芸生態博物館、高雄市立歴史博物館、新店文史館といった博物館のほか、日本からも国立民族学博物館と国立暦史民俗博物館が参加しました。来年も新たなシリーズフォーラムが計画されており、期待が高まります。

5　博物館と地域振興

博物館と地域振興というテーマについては、四つの側面から事例を挙げて説明したいと思います。一つ目は地域の文化資産の保存、解釈、管理、二つ目は住民に対する福祉と地域の永続的な発展、三つ目は博物館と地域の観光事業、四つ目は博物館と地域の伝統産業の振興です。

宜蘭県の二結地区では、地域内の道教寺院「王公廟（鎮安宮）」の建て替え計画をきっかけとし、一九九四年より町づくり計画がスタートしました。一九九五年にはコミュニティ内組織「大二結

図18　地域住民千人の手による旧鎮安宮移動事業

文教促進会」が結成され、住民たちは約三年にわたる「二結圳（用水路）」の再建および水路脇の緑化・景観整備運動や、地域住民千人の手で旧鎮安宮を移動させるという台湾全土で話題となった一大事業を押し進めました（図18）。そして一九九九年、移設され、修復が完了した旧鎮安宮は、住民と事業計画者の話し合いを経て「二結庄生活文化館」として利用されることが決まり、二〇〇一年末、王公廟の主神「古公三王（王公）」生誕の日にオープンしました。この古い寺院の保存をきっかけとして発生した運動は、文化資産の保存と町づくりを結びつけたというだけでなく、計画に住民が参加して文化資産の重要性を自ら見出し、さらに運営を主導するコミュニティ博物館も生み出しました。大二結文教促進会は近年、一九二八年に建設された二結農会（農業協同組合）の穀物倉庫の管理を引き継ぎ、地域の文化センターとして利用しています。促進会創設当時の理事長、林奠鴻氏は、地方文化館は地域の生活を伝えるもので、形式的なものではなく、二結地区の文化資産の保存、重要性の理解、管理に関する理念を示すものだと強調しています。

嘉義県新港鎮の町づくり運動は、同鎮在住の陳錦煌醫師が一九八七年に新港文教基金会を創設したことでスタートし、現在も継続しており、台湾における同様の運動のモデルケースとなっています。同基金会は地域住民の福祉とコミュニティの永続に関心を寄せます。読書をコミュニティの基礎を築くための基本的な作業と考え、図書の普及を主な活動内容としているほか、芸術・文化に関する各種展示・公演イベントの開催、環境保護や緑化・美化の提唱、コミュニティに関心を寄せる活動、国際交流活動を展開しています。二〇一八年八月に日本の岐阜県飛騨市にある神岡高校から生徒と教員十一人が新港鎮を訪れて七日間滞在し、地域の人々と交流しました。そし

て同年十月には新港の若者が飛驒市を訪れ、さらに関係を深めました。

宜蘭県蘇澳鎮の白米地区は旧名を「白米甕」といい、三方を取り囲む山の間を一筋の渓流が流れる土地柄です。もともとは風光明媚な地域でしたが、周辺の山々が鉱物を豊富に蔵していたことから、十カ所を超える採石場が開設され、数十年にわたり台湾全体の八〇％に当たる「白米仔」（石灰石）を産出しました。そのためこの地区の住民たちは長年、採石場を出入りする運搬トラックが巻き上げる砂埃の悪夢の中で生活してきました。一九九三年、地域住民たちは一致団結して自分たちの生活環境を改善しようと立ち上がり、「白米社区発展協会」を設立しました。翌年、白米地区の住民は「社区総体営造計画」の流れに背中を押され、白米地区という「絶望の集落」を「希望の村」へと変えることを決意したのです。

そして一九九八年、白米地区に文化・歴史館や木靴展示館、木靴工房、旅館が相次いで開設されたほか、「白米響展報」の発行、伝統的な木靴製造技術の伝承、木靴を活用した文化産業の振興などを進め、一～二年で大きな成果を挙げました。白米地区では現在、「白米木靴館」の開

図19　宜蘭「白米木靴館」

設だけでなく、木靴の要素を地域の中に分散、融合、統合し、住民、集落、環境、生態系全てを含むコミュニティ型のエコミュージアムを構築することを長期的な目標として掲げています（図19）。

先に述べた南投県埔里鎮・桃米地区は、面積が十八平方キロメートルでそのうち八〇％を丘陵地が占め、そこに三六九世帯、一二〇〇人余りが暮らしています。地区内は林相が豊かで草滴湿地も存在することから種の多様性が備わっています。一九九九年の震災後、住民たちは力を合せて復興を進め、健康、温かさ、希望、心地よさ、幸せを感じることで精神をより高いステージに引き上げ、生活に味わいを加えることを目指す桃米生態村の運営や、エコツーリズム事業の展開に取り組みました。こうした事業は年々発展を遂げ、現在では民宿二十五軒、レストラン六店のほか、地域色豊かな数多くの農産品店が営業しており、台湾中部の人気観光スポットとなっています。近年では桃米地区を中心とし、エコミュージアムのネットワークを埔里鎮全体に拡大した「埔里生活生態博物館」の整備に向けた努力が進められています。

新北市淡水区では、紅毛城、滬尾砲台、小白宮（前清淡水関税務司官邸）の三つの古蹟を中心として二〇〇五年に市立淡水古蹟博物館が開設されました。当博物館は、文化事業と観光産業を結びつけることを目指しており、古蹟の保存、保守、再利用に町づくりの活力を生かし、質の高い文化を備えた観光地にしたいと考えています。また博物館からは多元的で多様な芸術生活、生活芸術を創造しようという「淡水大芸術村」構想も提案されており、これにより淡水地区の文化観光産業に、より深みを与えたい考えです。淡水は既に多くの観光客が訪れる場所となっていま

す。こうした中、文化と博物館事業は観光産業の付加価値を高めることはできるが、過度な観光地化は文化の価値を貶める可能性があるのではないかといった問題について考える必要があるように思われます。例えば、観光による収益はどの程度、地域住民にフィードバックされているか？住民たちの生活の質は向上しているのか、などの問題を考えないといけません。「地域の発展」と「マスツーリズム」ではサービスの提供対象が異なるため、施設スペースの利用計画やリソースの配分、設備の配置、展示企画の方向性、教育活動計画などに影響を及ぼす可能性があり、いかにしてバランス・ポイントを見出すかが重要な課題となりそうです。

博物館と地域における伝統的産業の振興は現在、地方の町づくりにおけるもう一つの課題となっています。各県市の文化センターに文化、芸術と産業を対象とする「地方特色館」設置計画がスタートした当初、南投県竹芸博物館、苗栗県木彫博物館、花蓮県石彫博物館、新北市鶯歌陶瓷博物館、新竹市玻璃工芸博物館ではいずれも、既に衰退した地域の伝統工芸の復活を目標に掲げました。しかし、長年の試行錯誤の結果、現在ではその大部分が芸術化、すなわち非産業化の道を歩んでいます。産業が一定の市場規模を備えるためには、生産・製造技術に加え、習慣的な使用者、製品の販路を確保する必要がありますが、こうした問題は博物館の専門技術によって克服できるものではありません。このため、博物館が地方の伝統産業の振興を手がけることが可能かどうかという課題は再検討が必要となっています。

四　まとめ：住民が主役の地域博物館へ

博物館の専門家としての数十年にわたるキャリアを通じ、私は博物館の視点から地域の文化と住民を見て参りました。そしておそらく、若い頃に得た人類学の思考法とフィールドワーク体験、さらに故郷の宜蘭で地域の博物館事業を推進した経験から、地域の文化と住民の視点から博物館を見るようにもなりました。博物館の基本的な価値は、依然として知識の蓄積機関であり展示・学習の場ということにあります。未来を見据えると、博物館にはより多くの社会的責任が求められるようになり、きちんと社会に向かい合う博物館であれば、利用しやすく、平等を重んじ、住民が参加して地域の振興を図る施設であることが必須となると考えられます。

全体的に見ると過去四十年来、台湾における地方の文化事業および博物館事業は基本的に政府の政策によって導かれてきました。主なリソースの提供は政府が、専門知識は博物館の専門家、歴史学者、町づくりの専門家、文化資産の保存に関する研究者が担当し、地域の若い知識人も多少は事業に関与しましたが、大多数の住民は依然として成果を享受する立場にとどまりました。

国家レベルの博物館はその政策的な位置づけから、住民の運営参加には限界があります。しかし、地域の博物館や文化館は将来、住民を主役とすべきと私は考えます。こうした目標を短期間で実現することは困難ですが、目標を掲げさえすれば少しずつ前に進むことは可能です。事実、長い時間が経過しながら住民を主役とする地域の博物館という理想は達成できていないものの、政府のプロジェクトが進行する中で市民がエンパワーメントされ、民間のエネルギーが高まり、

良質な基礎が築かれています。

地域の博物館と住民の理想的な関係には三つの側面が存在します。一つ目は住民と共にローカル・ノレッジを収集整理する博物館です。その目標は、地域の自然と文化資産を保護し、博物館や文化館が地域に関する知識を蓄積する場となり、住民たちの記憶、生活、産業の中のローカル・ノレッジを収集して住民参加の下、共同で記録することです。二つ目は住民が共同で展示、公演、学習を行う博物館です。その目標は国民の文化的生活を豊かにすることです。博物館は市民が共同で展示や公演に取り組む場となり、さまざまな特色を持つ文化館は多様なエスニックグループの文化を展示し、公演を行う場となるのです。三つ目は住民が運営に参加、協力する博物館です。目標は文化市民社会を育み、地域の博物館や文化館の運営に住民が直接関与するようになることです。

図20　台湾の地方の文化事業・博物館事業に携わる人びと

私は今日、レジュメを完成させた後で二～三時間をかけ、これまで長年の間に訪問した各地の地域博物館や文化館でその地域の住民たちと撮った数百枚の古い写真の中から五十枚を選び出しました。彼らは皆、台湾のさまざまな場所で文化事業や博物館事業に携わる人たちです。私はこの人たちのふるさとに対する思いや事業にかける情熱に敬服し、そこから多くを学びました。この中の何人かとはその後、長年にわたる友人関係を築きました。彼らを東京に連れて来ることはできないため、写真を日本の皆さんにご覧いただき、地域の文化事業や博物館事業への参加に関心を持つ多くの方々にエールを送ることができればと考えました（図20）。

これまで地域の博物館は専門家によって運営され、その地方の文化資産の守護者、ローカル・ノレッジの持ち主、住民に対する展示・公演の場の提供者としての役割を果たしてきました。しかし今後は、地域住民が博物館の主役になってほしいと考えます。そこでは住民が運営に積極的に参加し、住民が自らの手で地域の文化資産を守り、ローカル・ノレッジを収集整理し、共同で地域の生活に関する展示・公演を行うのです。住民は博物館を利用するだけの存在ではなく、文化資産の守護者となり、博物館の展示・公演に関わる創造者となり、共同経営者となるのです。

今日は「博物館、市民参加と地域振興」というテーマについて考えてきましたが、私たちは博物館の視点から地域文化や住民の姿を見るというこれまでの態度を反省し、今後は地域の文化や住民の立場から博物館について考える必要があるのかもしれません。そうしてこそ博物館は社会の中でその存在意義を十分に発揮できるはずです。

以上です、どうもありがとうございました。

報告1

「台湾における平埔族の博物館資源活用と文化表象の構築―シラヤ族を事例として」

呂　怡屏（総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻）

総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻の呂怡屏と申します。今日は「台湾における平埔族の博物館資源活用と文化表象の構築―シラヤ族を事例として」というタイトルで発表させていただきます。

今日の発表では、地域文化であると同時に民族文化でもある台湾原住民のシラヤ族が行っている文化復興の事業を取り上げます。具体的には、シラヤ族が博物館と連携すること、およびそれによりシラヤ族のエスニシティが再形成される過程を紹介したいと思います。

本論に入る前に、台湾の現在の社会状況について説明してから、台湾における「地域」を考えたいと思います。一つは、台湾は多民族の社会であり、オーストロネシア系の先住民族、漢族、新住民もしくはニューカマーと呼ばれる主に東南アジアの人々で構成されていることです。二つは、このような多民族の状況があることから、台湾の地域文化を考える際には、民族集団の存在、および民族集団の間の関係を考える必要があるということです。

台湾で「原住民族」と呼ばれているオーストロネシア系の先住民族の人たちは、伝統的には台

湾の山域や東部の平野で暮らしてきました。日本統治時代には高砂族と呼ばれていました。

一九八〇年代に入ると、世界で先住民族の復権運動が起こってきたことにも影響を受け、一九八四年から高等教育を受けたエリートを中心に自らの土地権、自治権などの権利の主張、および文化の尊重を求める「原住民族運動」が展開しました。そして一九九四年に台湾の憲法改正で「原住民」という名称が憲法の条文に取り入れられることになりました。

しかし、台湾にはもう一つの原住民の存在があります。それが平埔族です。平埔族とは単一民族の名称ではなく、台湾のオーストロネシア系先住民族のうち、主に台湾北部と西部の平野に暮らしていて、漢族の文化を早くから取り入れた民族集団の総称です。早くから漢族化が進み、文化や言語の面で漢族に非常に近くなった平埔族の人たちは、現在も原住民としての法的地位をまだ得ていません。その中で、私が調査対象としているのは、十七世紀から文献に記録されてきた台湾の南西部に暮らしているシラヤ族（西拉雅、Sirayа）の人たちです。（図1、平埔族分布図）（出典：李亦園、一九五五年、「從文獻資料看臺灣平埔族」。地図の加筆作成：呂怡屏）

平埔族は台湾社会

図１　平埔族分布図

において、どのように位置付けられているかということを説明します。原住民族運動の影響を受け、一九九〇年代半ば以降、平埔族の人々も自らの主体性を強調し、原住民族としての法的地位を獲得するための正名運動を行っていました。

しかし、二〇〇〇年代から二〇一〇年初頭まで、原住民族に関する政策を進める行政機関である原住民族委員会は、平埔族の文化的特徴が著しくない、または平埔族が中央政府から配分する原住民補助の予算の大部分を奪い取るなどの理由で、平埔族の正名を承認しませんでした。このような状況に転機をもたらしたのが、二〇一六年五月に新たに就任した台湾の総統である蔡英文氏が、平埔族の正名運動を支持したことです。現在平埔族の人々の社会的位置は、まさに変化の中にあります。

一方、平埔族の人々は正名運動を並行させながら、まちづくりや手工芸再興など文化伝承をするための文化復興運動に取り組んできました。ここで、シラヤ族の文化復興の目的およびシラヤ族の文化復興と博物館の関わりを説明したいと思います。

どうしてシラヤ族の人は文化復興を行うのでしょうか。それは、シラヤ族は自らの原住民族としての社会的地位を求める上で、シラヤ族のエスニシティを示す必要があるからです。そのため、彼らは文化復興を通じて、エスニシティの再形成を目指しています。

また、シラヤ族の人はどうして博物館の収蔵品に注目したのでしょうか。さらに、博物館は文化復興にどのように役に立つのでしょうか。その理由は、彼らは物質文化を復元しようとした際に、時代と社会の変遷の中で失われたものを博物館に求めることができるからです。さらに、博

物館の収蔵品は元の所有者・集団による活用を通じて、民族文化の再興という新たな役割を生み出すことになるのです。

次に私の調査地であるシラヤ族のG集落の住民とその生活を紹介します。台湾の台南市におけるシラヤ族のG集落が所在するDH里は、嘉南平野にあります。二〇一八年八月の統計によりDH里に四〇四世帯があり、戸籍上は九七五人がいます。G集落の住民は、主に農業と出稼ぎにより生計を立てています。近年G集落では、集落の有識者たちがリードし、集落の歴史と伝統信仰に関する口頭伝承、集落に伝承されてきたシラヤ族の伝統信仰、および博物館の収蔵品の活用に基づく文化伝承を行っています。さらに、政府の援助も加わり文化復興の機運も高まってきました。

G集落における日常生活の様子は、台湾の地方でよく見かける風景です。ここで特に説明したいのはシラヤ族が古くから伝承されてきたアリッ信仰です。アリッ信仰は漢族の民間信仰と違い、神を象徴する像はなく、つぼや瓶を使って神の居場所としています。阿立を祀る場所は、現在では「公廨（Gongai）」と呼ばれます。（写真１）写真から分かるように、若い人や子どもにもアリッ信仰が受け継がれています。ここにはシラヤ族らしさが見られます。（写真２）

写真２

写真１

また、写真で示したように、毎年の旧暦九月五日アリッの生誕の日に、信者が公廨（Gongai）というところに参拝します。旧暦九月四日夜十一時から九月五日朝二時くらいにかけてシラヤ族の代表的な行事である夜祭が行われます。その際には、信者は神様に豚をささげ、神様に敬意を表すための歌と踊りを行っています。特に、集落の女性住民は夜祭で歌と踊りを神様にささげる大切な役割を担っています。（写真3）

続いて、G集落における文化復興と博物館の関係について詳しく説明します。二〇一〇年以降、G集落において博物館の収蔵品を用いた文化復興の動きは三段階に分けられます。第一段階はシラヤ族に関する資料調査です。G集落出身の文化復興の主導者であるD氏は、博物館と連携し、博物館に収蔵された歴史文献と衣装資料を調査しました。第二段階は集落へのフィードバックです。文化復興の主導者であるD氏は調査で得た知見、知識、感情などを住民に伝え、シラヤ族に関わる歴史への理解を高めることを狙っています。さらに、物質文化の内容と熟覧した後の感想も集落住民に共有しようと思っています。第三段階は再製（Reproduce）です。文化復興の主導者は集落の住民を集め、シラヤ族の歴史と衣装を題にする講義および刺繍の研修を実施し、住民を主体とする

写真3

製作活動の試みを始めています。

文化復興の第一段階の資料調査には衣装に関する文献調査と熟覧調査が含まれます。シラヤ族の衣装に関する調査と製作のきっかけは、二〇一五年五月、国立台湾大学で実施した衣装の熟覧です。当時、シラヤ族の文化復興の主導者は村から台北まで行き、台湾大学の研究者と一九三〇年代に収集した衣装のデザインと刺繍模様について検討しました。その際に、物を実際に見て研究者と討論することにより、D氏は台湾南部に暮らしているシラヤ族と周辺の住民の民族衣装の特徴を把握できるようになりました。

二〇一八年九月には、同じような調査を地元の台南市自然史教育館で行いました。そのときは、他の原住民族であるタイヤル族の工芸作家が調査を手伝いました。調査に得た資料をもとに、G集落の年中行事において着ようとしている衣装の再製計画が立てられました。

写真４

資料調査をした次に、文化復興の第二段階の主な事業は、D氏による書籍などの文献資料の内容や博物館で見つけたシラヤ族に関する歴史と衣装の資料を住民に伝えることです。二〇一六年からシラヤ族の歴史、衣装に関する知識および衣装に施した刺繍模様を住民に共有することを通じて、地元で刺繍工芸を再び生活に位置付けることを試みました。当時の参加者は、集落の女性

住民、小学校の児童とG集落で夏休みインターンの大学生です。（写真4）

博物館の衣装収蔵品において、D氏は特にかつて田んぼでよく見かけたキジが刺繍模様に含まれることに注目して、住民にも紹介しています。写真に示したように、両側に施された刺繍模様はキジです。（写真5）

第三段階は再製です。例えば、二〇一四年から夏休みの間にD氏は集落住民や小学校の児童を対象にしてクロスステッチ研修を行い、シラヤの伝統的なものづくりの再興を続けてきました。二〇一七年まで、ものづくりの成果は刺繍の表札とマグネットなどの実用的な小物です。参加者は刺繍や小物を製作する際に、調査で発見したキジの模様をよく取り込んでいます。

写真5

さらに、集落には新たに住民が集まったり、休憩するための空間がつくられました。かつてシラヤ族にも、他の原住民族と同様に、男子の集会所のようなものがあったことにヒントを得ています。建てられた休憩場所には、キジの模様が飾りとして入れられました。このように、小さなキジの模様の発見は、シラヤ族の動物や自然とのつながりを物語る、象徴的な動物につながっていく可能性があります。

今回の報告では、台湾における原住民族としての意識を形成する過程を、シラヤ族が多く暮らしているG集落の文化復興事業の特徴と、現段階の成果を通じて紹介しました。シラヤ族の文化

復興のリーダーは、エスノヒストリーと物質的な資料を調査し、集落の住民と調査の結果を共有することにしました。その上で、今を生き、未来に続くシラヤ族としての文化をつくり出すことに挑戦しています。

さらに、衣装に施した動物や植物の刺繍模様が活用されることと、シラヤ族の衣装が再製される動きが始まることにより、シラヤ族のエスニシティの可視化が期待されます。こうした動きは、シラヤ族を台湾社会に原住民族として位置付けるための営みとも考えられます。シラヤ族の人々は、自らの歴史とつながり、伝統的な工芸を活用して、現在の台湾社会における自分たちの原住民族としての存在を確立しようとしているのです。

写真６

最後には、調査の間に支えてくれる人たちに心より感謝しております。ご清聴ありがとうございました。

報告2

「地域住民とともに『文化遺産』をつくり出す：台湾大渓博物館の事例報告」

邱　君妮（総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻）

皆さま、こんにちは。ご紹介いただきました邱君妮（チョウ チュンニ）です。台湾出身、今京都在住です。台湾人のなまりで所々関西弁が入っているかもしれません。聞き取りにくいところもあると思いますが、ご了承ください。

今日、皆様にお話したいのは、一言で言えば、私が台湾大渓（ダーシイ）博物館のフィールドワーク調査で見たことです。学芸員がいかに地域住民と共に「文化遺産」を作り出すのかというストーリーです。

最初に、私が大渓博物館を事例としたきっかけを、皆様と共有したいと思います。

私は、当初二〇一〇年に、歴史的建造物から転用した博物館について研究するため、日本に来ました。そして、二〇一三年に総研大に入り、大阪にある国立民族学博物館の先生方の指導を頂きながら、研究を進めていますが、六年目になり、地域住民にとって一体博物館とは何か、との疑問が生まれてきました。そして、これまでの調査地の事例研究から自分が知りたいことが見えなくなってしまったのです。そのとき、私の恩人で、今日総合討論のコーディネーターを務めて

いる黄先生から大渓博物館を紹介していただき、本日の基調講演者である呂先生からフィールドワーク調査の協力を得て、調査をすることができました。

私が大渓博物館に着目した理由は、まさに、「人と人のつながり」です。大渓博物館の常設展示にある口述記録（図１）のように、博物館と関わっている先生方が大渓という地域についてどう思うのか、地域住民や学芸員が大渓についてどう思うのか、これらの全ての思いをできる限り大事にして活動するのが、大渓博物館の特徴です。

今日の事例報告を始める前に、改めて呂先生、黄先生、そして今日登壇の機会を頂きました日高先生に感謝を申し上げます。そして一番重要なのは、現地調査に協力してくれた二人の学芸員、林依靜さんと溫欣琳さん、この二人に、この場を借りて感謝を申し上げます。

図１　常設展示にある口述記録の展示

1　はじめに

はじめに、地域住民と共に「文化遺産」を作り出す際、よく見られる二つの課題に着目したいと思います。博物館は、マネジメントのみならず、いかにして教育、研究、展示に地元住民の意向を反映できるのでしょうか。そして、行政が作り出した歴史表象と、研究で明らかにした歴史、地元住民の間で蓄積された記憶の接合の場として、博物館はどのような役割を担うべきなのでしょうか。

先ほど、呂先生の発表で、本事例の背景となる台湾の社会変容を含めてご紹介いただきましたので、本発表はそれを踏まえて、大渓博物館が地域住民の意向を大事しながら行っている活動、そして常設展示と一つの特別展を紹介したいと思います。最後に、事例を紹介してから、また皆様と改めてこの二つの課題を考えてみたいと思います。

まず、大渓博物館が位置する桃園市（図２）を紹介します。桃園は、台北北西部の特別な都市で、近隣に台北大都市圏があります。桃園は、台湾では五番目に人口の多い都市です。この都市には多くの工業団地やハイテク企業の本部があり、多くの移民と外国人労働者が住んでいます。また、台北桃園国際空港があることで知られているこの都市は、首都・台北および北部の台湾にサービスを提供しています。この桃園市のなかの大渓はここにあります（図３）。大渓は一九世

図２　桃園市所在地

紀に開発され、台湾北部の重要な運河都市であり、商業活動の輸送の拠点となっていました。地元の木材製品産業、数世紀にわたる警察の歴史、歴史的建造物など、さまざまな歴史的特徴を持つ都市で、有形無形の文化財がたくさんあります。

2　台湾における文化施策と博物館事業

先ほど、呂先生から、台湾の文化政策と博物館事業の話として、二十年間にわたって地域作りの基礎を持つ大渓の活動と、大渓木芸生態博物館の設立背景を紹介していただきましたので、ここでは省略しますが、もう一度皆様に理解いただきたいことは、この地域における博物館の役割とコミュニティをベースにした地域博物館の枠組みの中で、文化遺産の保存と利用が進められた時代は、一九九〇年以降であるということです。これは博物館ができたきっかけです。つまり、これから紹介する内容は、いきなりできたわけではなく、時代の変容とともに、二十年間の努力がベースにあるということを、皆様にもう一度お話しておきたいと思います。

実は、初めて大渓で調査をおこなったのは、冬休みの平日でした。このときはあまり観光客がいなかったので詳しく話が聞けたのですが、市政府がいろいろプロジェクトをおこなって到来し

図３　大渓所在地

た観光ブームが、大渓の文化を傷つけたということを店の人から聞くことができました。

しかし、なぜ大渓の人はこんなに地元の歴史を大事にしたいのか。観光客が来ると経済効果があり、うれしいのではないでしょうか。しかし、そうではなく、違う考え方もあるかもしれません。観光客がいっぱい来て嫌な気持ちになることがあり、自分の文化を大事にしたいと思うようになったのではないかとも考えました。そこで、地域の歴史的建築物を重要視し、博物館活動に参加したのか、と聞いたところ、旧警察宿舎群を保存するかどうかで議論していた頃ではないか、との返事でした。

調べてみると、二〇〇一年には、「旧警察宿舎群」の保全が課題となり、地元の文化、歴史団体が保存を主張し、市政府との見解が異なり、地域住民の文化や歴史的な環境に対する意識が高まったという事態があることがわかりました。これがきっかけだったのです。

また、フィールドワークの間に、地域住民から肯定的な声が聞くことができ、博物館のプロジェクトに声をかけられるのを待っているという方もいました。なぜこのような良い傾向が見られたのでしょうか。そこでは、地域住民と共に「文化遺産」を作り出すことがキーになることが分かりました。

3　大渓博物館のミッション

現在、大渓全体がエコミュージアムになり、全ての地域住民が博物館の学芸員の役割を果たせ

る仕組みをつくろうとしています。大渓博物館の四つの使命は、大渓の人々によって運営し、展開がおこなわれ、木工芸の生活風俗などを保存すること、地域の文化を維持すること、また大渓の職人の技にもう一度注目すること、地域振興を促進すること、です。では、実際にこれらの使命を果たすために、大渓博物館は、どのように地域住民と共に「文化遺産」を作り出しているのでしょうか。

先ほど、呂先生もお話しされたように、現在、この博物館には新しい建物を造る予定はありませんが、その代わりに、この地域に二三のある古い歴史的建造物を修復、活用・保存し、二〇一九年にプロジェクトを完成することが目標とされています。

4　街角博物館の展示について

具体的には、博物館で力を入れているのは、地域住民からのローカル知識の収集、そして先ほど呂先生も話された街角博物館プロジェクトです。これらの活動では、基本的に、外部の専門委員や有識者を入れて、研修やワークショップを開催、街角の展示を博物館の常設展示の一部として位置付けています。学芸員と専門家及び地域住民が一緒に活動する枠組みです。そして、住民は、自分の暮らしの文化の物語を作ってもらうことを楽しみにしています。そのため、大渓の宝は、地域住民自分の目で見ることができます。これらの活動は、様々なメディアで記録しており、口述記録もYoutubeにアップしてありますので、興味がある方はぜひご覧ください。

また街角博物館の話に戻りますが、街角博物館はいろいろな可能性があり、形もさまざまです。例えば、店の空間に置いてある常設展示のような形もあり、違う物語を視点に入れた、特別展示のタイプもあります。

ここで一つ面白いストーリーを紹介したいと思います。残念ながら写真はありません。街角博物館にプロジェクト参加しているAさんの話です。Aさんの住宅は地域によく見られる町屋です。町屋というのは、「ウナギの寝床」といわれる京都の町屋とすごく似ていて、奥がとても長い町屋です。今やほとんど残っておらず、完全に残っているのは珍しくなっています。

最初はAさんの店で書道体験をさせていただきました。そして会話が始まったところで、まだ公開していない、作成途中の展示を見せてくれました。そのとき、Aさんは自分の家族の歴史をどう表現していくか迷っており、恥ずかしいといいながらも、誇りを持って家族の歴史や目標している展示を説明してくれました。そこで私が、「これは、家族歴史の文化遺産ですね、公開したら街角博物館になりますか。」と聞いてみたら、Aさんは、「私は確かにプロジェクトに参加していますが、これはまだです。違います。でも、街角博物館と言える日まで頑張りたいと思います」との返事がありました。

もちろん、本当にこの街角博物館というプロジェクトがコミュニティにどのような影響を与えるかを知りたければ、そのための調査が必要です。しかし、この地域の人々が博物館のプロジェクトを介して、地域に新しい価値を見出し、自分なりの文化遺産を作り出す機会になったと言えるでしょう。

5　大渓博物館の展示について

ここから、皆様と一緒に常設の展示を見ていきたいと思います。常設展示の建物（図４）です。日本式宿舎を改造した四つの建物がつながっているので、「四連棟（しれんとう）」と呼ばれています。ここでは、大渓の人々の暮らしに焦点を当て、大渓の文化を八つの部分に分けて展示しています。時間の関係でじっくり紹介できませんが、少し見てみましょう。

常設展の始まりは、一つのイントロアニメーションです。その内容は、時間軸により、大渓にいる人々と大渓にやってきた人々を紹介します。そして、古い地図や写真を表示して、大渓を取り巻く地理環境と自然環境を説明します。この出発点から、大渓という名前は大漢渓（川）に由来することを知ることができます。次は、常設展示の中心部となる大渓の人々の暮らし、文化の展示に入ります。その中には、地域の信仰のことについて、地域住民から集まった写真や口述記録映像で、ローカル知識を表現し、展示しています。そして、歴史的な町の計画、地図、ショップと住宅のスタイルの展示もあります。ここでは、歴史博物館でいつも見られる古文書や地図、模型による展示だけで

図４　常設展示の建物「四連棟」

はなく、実は所ところ、学術調査と口述記録を並立した記述方法で展示しています。そのほか、大渓の戦前の産業、お茶と樟脳の展示や十九世紀に活躍した商人と一九八〇-九〇年代に活躍していた地元出身の歌手の展示などもあります。

次の展示に入ると、突然、緑色の柱が出て来ます（図5）。これについては、黄先生から少し面白いストーリーを教えていただきました。これは四つの木造家屋の列です。ここには四家族が住んでいました。この緑色は、当時ここに住んでいた人が塗った色です。今の博物館の展示では、そこまで、ここを強調することはありませんが、今の博物館の展示を作るために過去を全部消すのではなく、一部でもできる限り残したい意図もあり、歴史的建築物の保存や活用するに際しては、大渓の人々の暮らしに焦点が当てられていることがわかりました。このような考え方が歴史的建築物及び景観を修復する際にも表れます。

例えば、ここで住んでいた人たちの家族から、自分の家が博物館になったことについての記録映像や、デスク、写真、日記などの家庭用品が、その思い出の一部として、常設で展示されてい

図5　当時住民が塗った色のまま展示される柱

ます。私はどうしてこのような個人的なものを博物館に展示したのか、すごく興味を持ち、学芸員に聞いてみました。しかるに、展示の一環としてこれらの家に住んでいた家族の物語を見せようとする理由は、歴史の一部を展示するため別の一部の歴史が削除される問題を避けるため、最善を尽くしたいから、とのことでした。もちろんこの建物は一〇〇年以上の歴史があり、全ての歴史を全部展示すると多分収まらないことになりますが、大事にしたい思い出が所ところで表現できるように、ここの学芸員はすごく頑張っていると思います。

また、常設展示の中では、地域住民がいかに自ら町の教育の振興に力を入れ、文化的な町を育ててきたかを展示しています。この大渓の文化が、地元の人々によってどのように確立されたか、との展示もありました。そこでわかったのは、博物館と地域との関係をどうやって築くかということも、他の地域と比べれば、もともとここの地域住民のつながりが強いので、真心で関係をつくれば、様々な可能性が展開できるのではないかということです。そして、展示の後半では、次の展示エリアに入る前に、屋外

図６　屋外のスペースにある「誰の家でしょうか」のパネル展示

のスペースを通過します。ここには一つパネル（図6）があります。ここでは、展示室を訪れるだけでなく、ここが大渓の人々の物語であることを強調するため、以前は誰かの家であった場所を訪れていることがわかるように表示しているパネルがあります。

展示第二部に入ると、大渓で一番重要な産業である木工芸につながるライフスタイルや、地域住民の協力し合う文化や職人のことを紹介しています。そして、口述記録をデータベースに基づき展示するコーナーもあります。学芸員によると、口述記録のデータベースを更新するとともに、展示も更新する予定だそうです。展示の終わりに入る前に、地域のまちづくりの歴史や地域住民の活動を紹介するコーナーがあります。ここでは、地域における博物館の役割や、コミュニティをベースとした博物館の枠組みの中で、文化遺産を保存し、活用することの意義を示しており、博物館の活動がどのように地域の文化遺産と地元の人々と結び付けているのかを考えることができます。そして展示の最後に、博物館側から来館者への手紙のパネルがあります。ここでの展示は、地域住民の共同調査の成果によって構成されており、大渓が繁栄できる協力の精神を象徴するように地域の職人によって作られた木工の工芸品が置いてあります。

ここで、最初に述べた課題を思い出してください。博物館はいかにマネジメントのみならず、教育、研究、展示に地元住民の意向を反映できるのでしょうか

以上の説明を聞いている間に「単なる常設展示の紹介ではないか」と思ったかもしれませんが、よく考えていただきたいのは、展示の構成や博物館運営のマネジメント、そして地域住民との共同調査、その間のプロセスを含めての教育と研究、そういったもの全て地域住民の協力があるこ

とで成立しているということです。常設展示から見て博物館、すなわち学芸員側はできる限りマネジメントのみならず、教育、研究、展示に地元住民の意向を反映させるように努力していると言えます。

そしてもう一つの課題が、行政が作り出した歴史表象と、研究で明らかにした歴史及び地元住民の間で蓄積された記憶の接合の場として、博物館どのような役割を担うべきなのかということです。

6　博物館はどのような役割を担うべきなのか

この課題について、一つの特別な展覧会から見てみたいと思います。十八坪の家の記憶の展覧会です。この展覧会を企画した学芸員によると、歴史的建築物は、空間として保存・活用しますが、地域住民の記憶こそが博物館のコンテンツです。これらの歴史的建築物は市政府が作り出したい「歴史イメージ」の計画で、修復できるかどうか、修復できたらどうなるのか、本当にわかりませんが、この展覧会を開催しないと何も残らないと思う、と述べていました。

ここで、市政府がこれらの空間や地元の歴史、言い換えれば要らぬものを経済活性化の資源とするために作り出した歴史のイメージと、学芸員が表現したいものと、地域住民が残してほしいものにギャップがあることに気が付きました。

ここでは家族の物語が主に展示されています。ただの展示ではなく、少し面白いやり方として、

若いアーティストを招待し、元々ここに住んでいた地域住民にインタビューをおこない、元住民の生活や家の思い出をアーティストの目を通して展示するということをしていました。このようにすることで、インタラクティブでコミュニケーションに満ちた展示ができました。元住民の視点をどのように表現するのが最優先かを考えながら、スタイリッシュかつ革新的な展示をおこなったのです。時間がギリギリですので、展覧会の中の二つの作品を見てみたいと思います。

「パパのメモ」という作品です。この部屋の物語は、ここに元々住んでいた五番目の息子が語った物語から構成されています。ここに住んでいたお父さんは、六十年以上日記を書いていたのです。彼のメモと思い出がここに展示されています。六十年以上生きていて、日本時代を経て、国民党政府時代もあって、そして戦後の台湾など、歴史の川の流れのようだったので、まさに歴史の川のような作品を通して、展示ができました。

そして「ママの一日」という作品です。これは、ここに住んでいた子どもによるものです。いつも自分のお母さんが竜巻のように忙しいと感じていたという子供の感覚を、アーティストが、お母さんが持っているものや、家族の記憶の写真を竜巻のような形で表す展示となっています。

7　まとめ

最後に、結論に入りたいと思います。本発表では、台湾桃園市の大溪木芸生態博物館を事例として、地域における博物館はいかに地域のコミュニティをベースとし、地域博物館の枠組みの中

で、文化遺産の保存と利用により、地域活性化の課題に向き合い、博物館という公共の場で記憶や人生の再現を取り扱えるか、ということを紹介しました。この事例では、コミュニティの発展のために文化遺産を保存し活用するための地域住民の活動を見ることができました。

これまで、「文化遺産」を作り出し、地域の活性化を考える際には、いつも何らかの「文化遺産」、例えば歴史的建築物やモノの発見などに新しい価値を見つけ出すことに重点を置いてきました。

しかし、この事例では、博物館はいかにして個人の思い出を収集し、人々の記憶や人生の経験を地域の「文化遺産」として、博物館に収集、展示するかに重点を置いていると言ってもいいでしょう。そして、地域住民と共に文化遺産をつくり出すだけではなく、博物館で地域住民が文化遺産の一部として表現されたとも言えるでしょう。地域住民の意向、すなわち「私たち」の感覚が博物館で表現でき、このレベルにまで実現できるためには、対話を構築する必要があります。二十年間まちづくりの成果を踏まえてここまでできるようにするには、地域住民との共同研究やインタビューで作った展示や、また、これらの物語を創造し、貢献し、生きたコミュニティからのフィードバックがとても重要です。そのフィードバックが、地域の文化遺産の一部となったことを意味します。

最後に課題と今後の可能性について提示したいと思います。大溪博物館は公立の博物館ですので、市民の税金から成る予算で活動していますが、何らかの理由で予算が計上されなくなったときには、どう活動を継続するのか、どう地域住民と持続可能な関係を保つのか。これは世界の多くの域博物館で見られる共通の課題です。

そして、博物館が積極的に一部の地域住民と関わることにより、他の地域住民を見過ごしてしまう可能性もあります。発表の冒頭でも話しましたが、桃園市の住民構成はとても多様です。先住民もいますし、移民や外国人労働者もいます。これらの皆さんが全部市民とも言えるでしょうし、地域住民とも言えるでしょう。すべての人を大渓博物館の物語にどう含めるかは、今後取り組むべき優先課題でしょう。どうすれば博物館は、誰でもフラットに参加できて、さまざまな価値観を持つ多様な人々と結び付き、全ての人の文化遺産が表現できるプラットフォームになれるのでしょうか。

また、記憶の展示によって文化遺産を作り出すことは、すべての地域住民に共感や同感をもたらすわけではありません。自発的に地域の歴史や文化を保存しようとする大渓の地元住民にとって、博物館がどのように生活に作用しているのか、続けて研究する必要があり、どのように自らの博物館の概念を捉えているのか。それはとても興味深い事例だと思います。

報告3
「言語学者を活用する―宮崎県椎葉村と国語研の取り組み―」

原田　走一郎（長崎大学　准教授）

長崎大学多文化社会学部の原田と申します。どうぞよろしくお願いします。私の話からは日本に移動して、この後の話とちょうど中間地点のようなところである宮崎県における、人間文化研究機構の国立国語研究所というところの取り組みをお話しいたします。

国立国語研究所は、例えば日本語教育を研究しているところがあったり、日本語の歴史の研究をしている人がいたり、そのような日本語や日本国内の言葉を研究している研究機関ですが、その中に方言を研究する人たちもいて、その人たちと宮崎県の椎葉村が共同でやっている研究のお話をいたします。具体的には、方言の辞典を一緒に作っています。

方言は紛れもなく地域文化の一つと言えると思います。サブタイトルに「地域文化の活用術」とあるとおり、地域文化を活用することに着目している今日のシンポジウムですが、では方言は何かに活用されてきたのだろうか。そもそも地域文化を活用するというのは何に活用するのだろうか。そのような問題意識を持って今日のお話を作ってみました。

今日のアウトラインを述べます。まず今日のお話の舞台である宮崎県東臼杵郡椎葉村の説明を

いたします。続いて椎葉村と国語研の共同研究の概要をさらっとお話しして、続いて椎葉村方言における特徴的な単語を二つ紹介いたします。それはなぜかというと、このような方言辞典を作ることがどれだけ重要であるか、どれだけ楽しいことであるかということをご説明したいと思うからです。続いて、二名の方に対してその調査に関するインタビューを行いました。その話をします。そして最後に今後の展望をお話しして終わります。

1　宮崎県椎葉村の紹介

ではまず、宮崎県椎葉村の紹介です。

このように、宮崎県と熊本県の県境、九州の中央に位置します（図1）。赤い部分が一つの自治体です。九州全体の地図でこれだけ大きく見えるので非常に面積が大きく、しかもどうやらこ

図1

れは近年の合併ではないようです。結構古くから大きな面積を持っていた自治体のようです。

九州というと南国とお思いかと思いますが、椎葉村は毎年雪が降ります。毎年雪が降るどころか、毎年雪が積もるような地域です。

それは九州山地の上の方にあるからです（図2、3）。全体的に椎葉村の標高は高いのですが、それにプラスして、見て分かるようにものすごくアップダウンがあるのですね。アップダウンというレベルではないですね、起伏ですが、まさに「急峻（きゅうしゅん）な地形」という形容がぴったりなところです。

文化的には神楽、焼き畑などが有名です。特に神楽に関しては、村主体で保存の努力がなされてきました。

ですが、自治体として方言に対する取り組みは行われてこなかったようです。

こちらは、日本全体と椎葉村の人口の動態を示したものです。日本全体も最近減少傾向に入りましたが、椎葉村はもうだいぶ前から減少傾向ですね。一九六〇年代からぐんぐん、しかも減少の

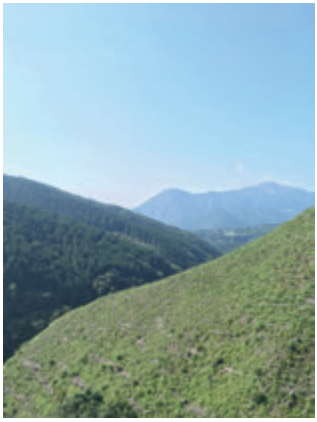


図2

図3

比率もすごい勢いで減っています。

このような人口の減少に伴う方言の衰退。そして、先ほど申し上げたとおり、面積はそもそも広いのです。かつ、アップダウンがものすごくある。つまり、ある地点とある地点が行きにくく、交流がしにくいわけです。そうすると言葉が各地域でどんどん変わっていくのです。その結果出来上がるのが、村内でのバリエーションが非常に多いという状況です。

そうなるともう専門家を呼ぶしかないということで、椎葉村の側から、専門家を呼んで方言の辞典を作ろうということになりました。そして呼ばれたのが山本友美さんという方です。元々この近隣で方言のフィールドワークを行っていた方で、この方を呼んで方言辞典を作ってもらおうということになったようです。この方は今も椎葉村にお住まいで、博物館の学芸員をなさっています（図４）。

この山本友美さんが国立国語研究所に声を掛けて、椎葉村と国立国語研究所の共同研究が始まった、そのような経緯です。

図４

2　共同研究の概要

続いて、共同研究の概要についてお話しします。「椎葉民俗芸能博物館研究事業」と書かれた書類をお見せします。このような博物館があるのですが、その博物館の研究事業として、この方言辞典の作成を行うようになりました。

共同研究の中身の話をちょっとすると、先ほど申し上げたとおり椎葉村は大変広いので、便宜的に全域を十くらいに割って、この十カ所の辞典を作ることにしております。もう一応十地点全部の調査は済んで、編集段階に入っています。

山本さん一人ではとてもできない仕事の量なので、年に二～三回ぐらい、国語研でチームを組んで調査を行ってきました。

つまり、山本さんは学芸員として現地で勤務して、自分でも調査して辞書の編さんもします。ところが一人では分からないことがたくさんあるわけですね。そして、マンパワーもそもそも足りないわけです。ですから、調査上の相談を国語研にしたり、あとは辞書の編さん上のサポートなども国語研から受けたりしています。このように現地と研究機関が、本当に手を取り合って行う形の研究が、今進んでいるところです。

地元の新聞記事にもこのように取り上げられています。この中に、プロジェクトの発起人であり、後にも出てくる甲斐教育長という方が、こういう言葉を述べていらっしゃいます。「方言は土地に根差して暮らしてきた先人たちが、文化や社会を独自の語彙で表現したもの。記録として

残して共有することで意味や価値を理解し、誇りをもって使い続けてほしい」とあります。

ここで「先人たちが文化や社会を独自の語彙で表現したもの」という言葉が出てきましたので、今からそのような単語をご説明したいと思います。

3　特徴的な単語

椎葉村と国語研の共同研究で明らかになった面白い表現です。「かまで」と「かまさき」という、この二つの単語について、今からお話しします。

これは実際私が経験したことなのですが、ある日調査をしていると、おじいちゃんがこちらから聞きもしていないのに、いきなり面白い言葉があるよということでお話をしてくれました。それは「かまで」と「かまさき」という言葉だと教えてくれました。

「かまで」は右の意味で、「かまさき」は左の意味だよと教えてくれました。鎌を持ったときの手元が「かまで」、それで右。この刃の先が「かまさき」で左側という意味だよ、と教えてくださったのですね。特に焼き畑のときに使うと教えてくれました。

これが実際に鎌を持って説明してくれている写真です。鎌の手元が「かまで」、右ですね。鎌の先が「かまさき」で左。

椎葉村は農業主体の地域ですから、鎌を使うのはもちろん日常的なことだっただろうし、非常に椎葉の生活に根差した表現で面白いなと思いました。

ところが、どうも標準語の右と左と全く同じというわけではないようです。この「かまで」と「かまさき」は、実は常に斜面に向かって右か左を言うのです。標準語の右左だと、例えば私が客席を向いて右といえば下手側ですね。反対を向いて右といえば上手側なわけです。

ところが椎葉方言の「かまで」と「かまさき」は、斜面、例えば舞台の奥から手前に向かって斜面があるとしましょう。このように斜面があるとしたら、常に斜面に向かって右。だから、常に上手が「かまで」です。私が斜面に背を向けたら、標準語で右と言えば、先ほどと反対側のことですね。ところが「かまで」は常に上手側なのです。斜面に向かって常に右が「かまで」です。

もう一度説明しますと、斜面に向かって人が立っているとしましょう。そうすると最初の説明どおり、右手側が「かまで」、左手側が「かまさき」。これは問題ないですね。

逆に今度は斜面に背を向けてみましょう。仮に標準語の右と椎葉方言の「かまで」が一緒のものだったとしたら、私の右手側が「かまで」、左手側が「かまさき」になるはずです。ところがこうはならないのですね。

図5

実際どうかというと、斜面に背を向けたところで斜面は決まっていますから、「かまで」はこちら、「かまさき」はこちらとなるわけです（図５）。

これは何がいいかというと、先ほど農作業をするとき、特に焼き畑をするときに使う単語だと申し上げましたが、農作業は一人でするわけではないのです。たくさんの人数でやります。そうすると、誰がどこを向いているか分かりません。いろいろな人がいろいろなところを向いているわけです。

そんなときでも斜面は共有されていますから、というかそもそも椎葉村はあまり平地がないので、大体農作業をやるときは斜面なのです。なので、斜面のこちら側というのはすぐ分かるわけです。ですから、「かまで」と「かまさき」という二つの単語は、斜面での共同作業に適した、椎葉での生活をもろに反映した単語だと言えると思います。これに、私は非常に感動しました。

このように方言や言語には、人々の世界に対する認識、生活様式、歴史が刻まれていると言えます。実際先ほどの「かまで」「かまさき」などは、本当に先人の知恵そのものだと言えると思います。

ところが、そもそも焼き畑自体が衰退してきていますし、そういった地域独特の生活習慣の衰退や、標準語の影響でそのような方言は今、姿を消しつつあります。

そのような状況に対して何かしらのアクションを起こそうということで、われわれは方言の記録を作っているわけです。

4　二名の方のインタビューから

その記録を作る過程で、現地の方は調査を受けるわけです。ですので、現地の方に「方言調査を受けて何かしらご自身の生活や考え方などで変化がありましたか」と、インタビューというほどのものでもないのですが、聞いてみました。

一人目の方は、「昔は方言を話すのが恥ずかしいと思うこともあった」とおっしゃっています。この方は椎葉を出たことがある方です。「しかし方言調査を繰り返し受けて、方言もいい言葉だなと思うようになった」とおっしゃっています。つまりこれは方言調査を通して、方言に愛着を持つようになった。方言も地域文化の一つだと言えば、調査を通して地域文化に愛着を持つようになったと言えると思います。

もう一名の方。こちらは先ほどの教育長ですが、「方言調査を通して変わったことはあまりない」とはっきりおっしゃってくださいました。でも、「方言の記録作成は大事だ。何もせんければ、何も残らんわけじゃから」とおっしゃっています。

また、このようなエピソードを語ってくださいました。「私が昔、役場に入ったときに、体の健診に行くわけよね。なかなか順番に並んでくれって言っても並ばんわけよ。普通、保健師さんとか役場の職員が、『はい順番に並んでください』って言っても並ばんわけですよ。でも、例えば『並ばにゃ仕事ができんが』ってゆーたら並ぶわけですよ」「地元の人間が言っとるってなると並ぶわけですよね。そーゆー力があるわけよね」とおっしゃっています。

もう一つ似たようなエピソードを語ってくださいました。「コンブ」という単語についてのエピソードで、「子ども」、特に「かわいい子ども」という意味らしいのですが、これは使うシチュエーションが特徴的で、特に家庭内で使うそうなのです。

ちょっとエピソードを読みましょうか。「家族が言うじゃないですか。『コンブがした、やー、えらいねー、あんたー』って。そういう言い方をするわけじゃないですか。そこがやっぱり、何か、『誰々ちゃんはあれしたね、よかったね』じゃなくて、コンブっていう言葉使うわけで、相手って分かるわけじゃから」と。

「そーゆーのが方言の力じゃないかなって。私ども、方言の中で育ってきとるからそれを残していった方がいい」というように、言葉の意味だけでなく、どのようなときに使われるか、どういう人間関係で使われるかといったところも含めて、方言で伝わる、むしろ方言でしか伝わらないことを、この教育長は非常に強調されます。

これは考えてみれば当たり前のことですが、方言でしか伝わらないことというのは、方言を共有している相手がいないと、そんなものは存在し得ないわけですよね。それを考えると、やはり方言にも人と人をつなぐ力、人とコミュニティをつなぐ力があるのではないかと思います。

これはややというか、非常に強引な論法ですが、一人目の事例で方言調査は方言への愛着につながると。二人目の事例で、方言は地域への愛着につながるのだとすれば、方言調査は地域への愛着につながるはずです。かなり強引ですが、これはある種の事実を捉えていると思います。

つまり椎葉村では、方言調査を行うことで、住民自身に、住民が持つ地域文化の価値に気付か

せることに成功したのではないかと私は考えています。

自然と存在している身近なものの価値というのは、放っておいても結構気付かないのですね。外部から何らかの刺激がないと、気付くことは結構難しいのです。これは方言に限らずどのようなことでもそうだと思うのですが、今回は方言の話ですので、方言の価値に気付くには、やはり言語学者がこのように調査に入って、外からの刺激が入ったことによって、このような気付きが起こったのではないかと言えると思います。

しかし当然今のようなことが全ての人に当てはまるわけではありません。本当に方言調査がコミュニティにどのような影響を与えたかということを知りたければ、先ほどの話でもありましたが、そのための、実際どのようなインパクトがあったかという調査が必要になるのです。でもそんなことをしていたら、その間に方言がどんどんなくなるわけです。ですから、それは方言学者の仕事ではないだろうと思います。言語学者は言語学を優先してするべきだと思います。

言い換えると、言語学者は自分の仕事を、つまり言語調査をしていたとしても、そのような効果を生むことがある。常に生むとは思いませんが、生むことがあるということです。

では、方言という地域文化はどのように活用されたのかということを考えていきたいと思います。普通、地域文化の活用というと、例えば観光資源としての活用、あとは教育のための活用、などが考えられるかと思います。

あえて分類すると、観光資源としての活用といった場合、コミュニティの外から人を呼んで、来てください、ということです。これは、コミュニティの外部を志向した地域文化の活用と言え

るかと思います。一方、教育のために活用するといった場合は、コミュニティの中を志向した地域文化の活用法だと言えると思います。

方言の活用は、地域への愛着というところでしたので、コミュニティ内部を志向した地域文化の活用と言えると思います。地域文化を活用するといった場合、どうしても外部から人を呼んで、できたらお金も落としてもらってというように、コミュニティの外部を志向した地域文化の活用が非常に目立ちがちです。しかし、このようなコミュニティの内部を志向した地域文化の活用も、改めて評価されていいのではないかと私は考えます。

実は椎葉村と国語研の共同研究の計画の最後のところに、このような文言があります。「さらに調査により村の方言の価値を改めて見直し、失われつつある地域の伝統文化を再認識する機会を創出し、『夢・生きがい・幸せ』な村の人々の生活に資する」ということが書いてあるわけです。椎葉村はこの研究を計画した時点で、単に方言を記録するだけではなくて、その先にこのようなことを見通していたわけです。そういった意味で椎葉村の研究計画には、非常に先見の明があるなと私は思います。

5　今後の展望

では、最後に今後の展望で終わりますが、なぜ椎葉村での研究がこれほどのインパクトを人々に残せたのか。これは長期滞在する研究者がいたからだと、私は思います。そしてそれをサポー

トする体制があったからだと思います。

これからの課題としては、研究者がいなくても何かしらできるような活動を考える必要がある。もしくは、このような長期滞在型の研究者がいるなら、長期滞在型の研究者をサポートするような体制が各地で構築されることが、今後の課題だと言えると思います。

最後に、このプロジェクトでは昨年度にブックレットを五冊出したのですが、そのうちの歴博のブックレットから二文ぐらい紹介して終わりたいと思います。

こんな文があります。「地域の歴史や文化の〝核〟というのは、時にはかたちを持たない、人びとの心のなかにあるものといえるかもしれません」。

まさにそのとおりだと思います。言葉というもの、特に方言は書かれるものではないので、目に見えないし、手で触れることもできません。でも、やはりそういったものが地域文化の核の一つだと言えると私も思います。

しかし、触れられないから何もしないというわけにはいかないわけです。

先ほどの文に続く歴博のブックレットの文がこれです。「そうした心のなかの歴史や文化への興味や関心を、絶えず呼び覚まし、行動にかきたて、またそれを助けることができるつながりを作りあげるべきだともいえるでしょう」。まさにそのとおりだと思います。

先ほど申し上げたように何かしら、例えば地域で研究をする研究者をサポートする体制などをわれわれは構築していく必要があるだろうと思います。それを考える際に、今回の椎葉村と国立

国語研究所の共同研究は、反省点も含めて学ぶべきことが多い事例だったのではないかと思います。

「だんだんなお」というのは、椎葉の言葉で「ありがとう」ということです。ご清聴ありがとうございました。

報告4

「被災した家財の資料化作業を通して地域をみつめる―宮城県気仙沼市の事例から」

葉山　茂（人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター　研究員／国立歴史民俗博物館　特任助教）

1　はじめに

私は宮城県気仙沼市での取り組みを紹介して、「市民とともに地域を学ぶ」ことについて考えてみたいと思います。宮城県気仙沼市は、東北地方太平洋沖地震による津波で被災しました。私は、その気仙沼市で文化財レスキューという活動に参加してきました。その活動は現在も、市民の方々とともに続けています。今日はその活動を皆さんに紹介します。

私は、人間文化研究機構の研究員をしています。実際には国立歴史民俗博物館（以下、歴博）に派遣されていますので、今日は歴博のメンバーとして活動している内容をお話します。

気仙沼市での文化財レスキューのおもな内容は、津波で被災した文書や民具などの生活資料を被災現場から救い、救った生活資料を長期の保存に耐えられるように処置する作業です。同時に、救って保全した資料を地域のなかでどう活かすかを課題として、地域文化を再発見するための仕組みづくりを検討しています。

私がこの活動に参加することになったきっかけは、二〇一一年四月二十一日に上司から、「明日から気仙沼に行くけど君も行かないか」と声をかけられたことでした。「車の席が一つ空いているから、おまえも来ないか」と言って誘っていただいたのが縁で、現在まで七年間にわたって気仙沼での作業に関わっています。

そこで今日は、歴博が個人住宅を対象に続けてきた家財の救出活動と、その資料化作業の過程で起きたことを紹介します。最初に述べたように、この活動には市民の方々が参加しているのですが、今日はその市民参加型の文化財レスキューの成果と課題をお話したいと思います。

今日の話の流れですが、まず気仙沼での文化財レスキュー活動を紹介します。その後、気仙沼の文化財レスキューに市民が参加するようになった経緯をお話しします。そして、市民が活動に参加することによってどのようなことが起きているのかという、作業の実際の話をします。最後に市民参加型の文化財レスキューの成果と課題をまとめます。

2　気仙沼における文化財レスキュー

文化財レスキューは、被災した文化財、物質文化、いわゆるモノを救って後世に伝えるための処置をする活動です。兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）のあと、文化財レスキュー活動が注

目を集めるようになりました。二〇一一年の東日本大震災の災害が非常に広域であったことから、この被災した地域で被災資料・史料を保全する活動がさかんになり、文化財レスキュー活動が社会にも広く知られるようになりました。

この活動では、有名な文化財や指定された文化財はもちろんですが、それ以上に指定されていないもの、あるいは個人の家に所蔵していて、場合によっては所蔵者も存在に気付いていなかった資料・史料も含めて、地域の歴史を示すもの、あるいは地域の文化を表わすものを残すことを目的としています。

現在では、新聞などのマスメディアが、ときどき、被災した住宅のふすまを解体してみたところ、なかから古文書が出てきたという話を取り上げています（写真1）。したがって、文化財レスキューの成果を思い浮かべるときには、文書・歴史史料のイメージが強いかもしれませんが、そういうものを含んだ文書のほか、民具などのモノを被災現場から救い、保存処置をする活動が文化財レスキュー活動です。

歴博が東北地方太平洋沖地震の被災地で携わってきた文化財レスキューを紹介しましょう。歴博が対象としたのは個人住宅です。個人住宅を対象とした活動は、とくに歴博が特別というわけではなく、全国の資料保全ネットワークをはじめ、さまざまな組織が個人住宅を対象に文化財レ

写真1　襖の裏張りをほぐす

スキューをしています。歴博の活動は、こうした活動の一つに位置付けられます。

一方で歴博の場合、二〇〇八年から博物館の展示室をリニューアルする事業が始まっていて、その中で気仙沼市小々汐にあった尾形家住宅を展示室に再現する予定がありました。その事業が縁で、災害のあと、尾形家住宅に入って文化財レスキュー活動をすることになりました。

写真２　被災現場で生活資料を拾う（2011年７月）

写真３　市民が参加したクリーニング作業（2011年６月）

活動の結果、全部で一万九八五二点の資料を拾いました。資料の総数は数え方によって変わりますので、この数字もおおまかな目安です。救った資料の内訳は、生活用具や民具など物質文化に関わるものがおよそ五〇〇〇点です。それから文書類がおよそ一万四八〇〇点あります。文書類のうち一番多い資料は、ハガキです。ハガキはおよそ五〇〇〇点あります。また一万四八〇〇点の文書類のなかには、封書、領収書、証文などが含まれています。こうした生活資料をまず私

たち歴博のメンバーが被災現場で拾ったあと（写真2）、七年間かけて、気仙沼市教育委員会の方々や市民の方々に協力していただいて、泥を落としたり、水で洗ったりするクリーニング作業（写真3）と資料台帳に登録する資料化の作業（写真4）をしてきました。

この活動の特徴は、市民と研究者が協業してきたところにあります。市民の方々は、クリーニングや資料登録の作業の合間や休み時間などに、扱う資料に関してさまざまな話をします。モノに関連した知識、地域の文化、自分の経験について話をすることが多いのですが、それらの話には気仙沼という地域での人びとの暮らしを理解したり、地域の文化を再発見したりする上でカギとなる事柄が多く含まれています。研究者にとっては、それらの話は非常に興味深いものであり、私たちはそれらの話をビデオカメラで撮影したり、ノートを取ったりして、記録してきました。

写真4　市民による資料登録作業（2012年1月）

3　尾形家住宅と尾形家

さて、私たちが活動の対象としてきた尾形家住宅と尾形家について説明します。

尾形家住宅は宮城県気仙沼市の小々汐地区にありました。気仙沼市は宮城県で一番北部に位置します。小々汐地区はその気仙沼市の中心部と気仙沼湾を挟んで対岸にあり、背後に山がせまる地域です（図１）。

尾形家住宅の母屋は茅葺き屋根を保っていることが特徴でした（写真５）。正面の長さが十二・五間（約二十三メートル）ありました。住宅は一八一〇年に建てられて、被災まで約二〇〇年建っていました。

小々汐地区は血縁や姻族関係にある人びとが集まってできた集落だと言われていますが、この尾形家はその小々汐地区の総本家にあたります。尾形家は江戸時代から昭和の初期まで、イワシ網漁の網元として地域の人びとの経済的な中心となってきました。また、水田や畑などを経営し

図１　小々汐の位置

写真５　尾形家住宅の母屋（2010年12月31日　勝田徹撮影）

てきました。江戸時代の慶長奥州地震津波のあと、伊達藩は製塩業を推奨し、気仙沼地域でも製塩業がさかんになりますが、尾形家は製塩業に使う薪を提供する御塩木山（おしおぎやま）の管理を任されており、山林経営にも携わっていました。

尾形家は小々汐を中心として漁業だけでなく農業、林業にも参入して多角的な経営をすることで経済力をもちましたが、その経済力を背景に政治の分野でも活躍しました。江戸時代には村の庄屋である肝入を歴任し、大正時代には当時この地域の行政区であった鹿折（ししおり）村の村長をしています。また昭和から平成にかけては、町議会議員、市議会議員も歴任してきました。経済や政治の中心となることで、尾形家住宅は人が頻繁に出入りしていましたが、人が集まることで信仰や年中行事をはじめとする生活文化もこの家を中心に発展しました。

尾形家は経済・政治・文化の中心となることで、この家には地域の歴史がモノとして蓄積され、それらが残ってきました。しかし津波で住宅が流されたことをきっかけに、蓄積したモノが文化財レスキューの対象となり、活動に参加した研究者と一部の市民限定ではありますが、人びとの目にも触れることになりました。

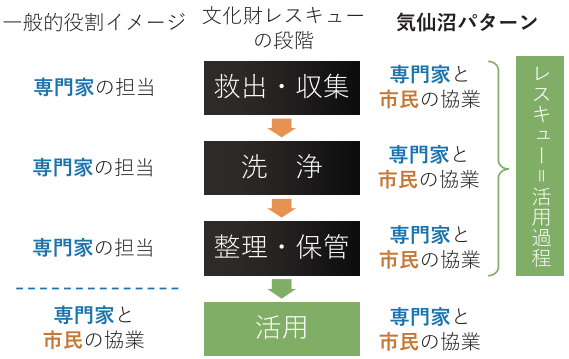


図２　文化財レスキューにおける専門家と市民の関わり

４　市民参加の文化財レスキュー体制ができるまで

文化財レスキューにおける専門家と市民の関係を整理すると、図２のような構図を描くことができます。もちろんこれは単純化した概念図ですので、この概念図に当てはまらない、文化財を扱う専門家と市民が協業して文化財整理をするさまざまな試みがあることは先に強調しておきたいと思います。

ただ一般的な傾向として、文化財を救い、保全措置を施して資料化するまでの過程は専門家が担い、保全した資料の活用を検討したり、あるいは保全した資料を活用した事例を教えられたりする側として市民が参加する場合が多いのです。

こうした傾向に対して、気仙沼で私たちが携わった活動は、私たち博物館の職員と行政、市民の方々が協力することで、資料保全と資料化の作業という、本来は専門家が担う部分に市民が参加した一つの事例として位置付けることができます。

文化財レスキューは、モノを救出する過程と、モノについた泥を落としたり水洗いをしたりしてきれいにする洗浄の過程、それから最後に資料登録をしたり整理・保管したりする過程があっ

緊急雇用創出推進事業の計画（2011年2月）
気仙沼市教育委員会が貝標本の整理を計画
気仙沼市シルバー人材センターが募集・雇用

2011年3月11日　東北地方太平洋沖地震

国立歴史民俗博物館による
尾形家家財のレスキュー（5月～）

6月 国立民族学博物館による資料洗浄講習
気仙沼市教育委員会が緊急雇用メンバー派遣
→作業の長期化によりメンバーが常駐
緊急雇用創出推進事業（震災枠）を活用した**増員**

7月 市民によるレスキューチーム成立

図３　市民参加の文化財レスキュー体制ができた経緯

て、その後に活用の過程があります。私たちが経験した気仙沼の作業は、最初から市民の方々に参加していただくことで、レスキューの過程そのものが文化財の活用の過程になっていたところに特徴があります。

では、どのようにして文化財レスキューへの市民参加が実現したのでしょうか。図3は市民参加の文化財レスキュー体制ができるまでをまとめたものです。結論から述べますが、これは全くの偶然の産物でした。気仙沼市では二〇一一年四月から緊急雇用創出推進事業という国の事業に基づいて、気仙沼市が所蔵する文化財・資料についても行政が雇用をつくって人を雇うことを計画していました。緊急雇用創出推進事業は過疎・高齢化が進む地域での雇用促進を目的としたものです。

この事業に参加するメンバーは災害前の二〇一一年二月に決まりました。当初は気仙沼市教育委員会が管理している多数の貝標本を整理して、展示することを計画していたそうです。募集対象者は定年などで退職した方々であり、気仙沼市シルバー人材センターが雇用する仕組みになっていました。

二〇一一年三月十一日に東北地方太平洋沖地震が起きて、気仙沼市は津波で大きな被害を受けましたが、その後、私たちの歴博の職員が中心となって、尾形家の生活資料を救う活動を始めました。それが二〇一一年五月です。

六月に国立民族学博物館（民博）の日高先生にお願いして、気仙沼市のリアス・アーク美術館で資料をクリーニングするための講習をしていただきました。そのときに、気仙沼市教育委員会

の計らいにより、さきほど述べた二月に集めたメンバーが参加しました。最初は「津波で被災した貴重な資料があって歴博の人たちが困っているので、二、三日ちょっと手伝ってあげてください」と言われてきたのだそうです。

さらに民博の日高先生による講習の数日後に、「緊急雇用創出推進事業（震災枠）」と呼ばれる被災者支援のための事業により、津波で被災した方々が気仙沼市教育委員会の求めに応じて気仙沼市シルバー人材センターを通じて雇用され、増員されました。そして、七月には市民によるレスキューチームのメンバーがほぼ決まりました。このあと、工場の復旧が進み、地域の雇用が戻るなかで毎年、事業名目の変更やメンバーの入れ替えなどを経て、規模を縮小しながらですが、七年間、市民が文化財レスキューや資料整理に携わる状況が続いています。

活動に参加してきたメンバーの経歴は多彩です（表1）。気仙沼のレスキューチームには、教育委員会の嘱託職員を経験した人、元病院の事務員、化石コレクター、被災した水産加工場で働いていた人、被災して店を失った飲食店の経営者、漁船の元船員などが集まりました。世代も、緊急雇用創出推進事業だけでは六十歳以上の人びとが中心になるのですが、緊急雇用創出推進事業(震災枠)に応募した方々のなかには四〇歳代の現役世代の方々

災害前の職	資料整理経験	人数
教育委員会嘱託職員	有	1名
病院事務	有	1名
化石研究家	無	1名
水産加工業従業員	無	1名
飲食店経営者	無	2名
漁船乗組員	無	1名

（当初は市教委嘱託職員3名も参加）

表１　文化財レスキューに参加した市民の多様な経歴

も含まれていました。

こうした多彩な経験をもった人たちが集まる一方で、集まった人たちは博物館で働いた経験はありませんでした。しかしこうした多彩な経験をもつ人たちで構成されるチームの良さは、むしろ、その人たちが人生の中で培ってきたさまざまな知識が結集する点にあります。気仙沼市での文化財レスキューは、それぞれの人たちが過去に経験してきた知識を結集して共有することで深化してきました。

5　市民参加で起きたこと

市民が文化財レスキュー活動に参加することで起きたことを紹介しましょう。先ほど述べたように、レスキューの活動の場において、人々が生活の中で得た知識がしばしば活用されました。私たちはいろいろなものを被災現場から拾い上げて作業場に持って帰りました。すると、作業をする市民の方々が私たちの持ち帰ったモノや文書を見て、モノについての知識やそれぞれの記憶、経験などを語り始めるのです。

文化財レスキューや資料整理の過程で、私たち研究者はしばしば市民の方々が語り出す場面に出会いました。市民の方々は自らの知識や経験を語ることで、自分たちの地域の歴史を共有していきました。その結果、市民の方々が地域の生活や文化に対して、改めて興味を持つようになりました。

写真６　クリーニング前の御膳（尾形家所蔵）

写真７　クリーニングして真綿で磨いた御膳（尾形家所蔵）

形家が所蔵し、集落で慶事があったときに集落の人びとに貸していたお膳です。尾形家ではこれらの御膳を集落の倉庫に保存していました。しかし倉庫も二〇一一年三月の津波で被災し、三月中に自衛隊がその集落の倉庫を壊して被災者、犠牲者を探すことになりました。そこで地域の人たちがトラックを借りてきて、自分たちで救って保管していたものです。写真６はクリーニングをする前の写真ですが、御膳は被災したこともあり、泥が付いて、漆器の色も少しくすんでいま

では、どのようなことが起こったのか、具体的な例を示します。まず、生活で得た知識が文化財レスキューで活用された一つめの事例です。それは、「漆器は真綿で磨くと光沢が出る」というものです。これは漆屋の娘であり、漆の扱いを経験上、よく知っていた方が言い出したことです。

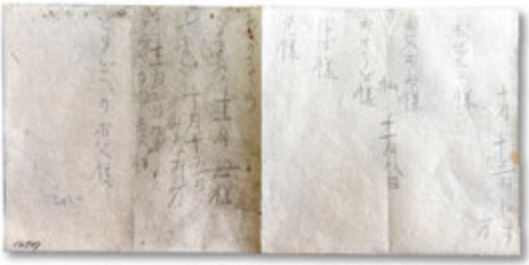
写真６と写真７は、尾

す。作業に参加した方が、「真綿で磨くと光沢が出る」と言ったので、みんなで真面目にやった結果、写真7のように漆に光沢が出てきれいになりました。民具の保全では、そうした市民の人々が日常で培ってきた知識が、発揮される場面が大いにあるのです。

もちろん、こうした市民の方々から挙げられる提案が、博物館がめざす保存科学的な観点からみて望ましいものかと言えば、全てが望ましい方法というわけではありません。例えば、被災現場にながく置かれていて漆が剥離した食器をどう処理すればよいかについて、「漆器は真綿で磨くと光沢が出る」と提案してくださった方に尋ねたことがあります。すると、漆が剥離してしまったら全部一回はがして塗り直すという答えが帰ってきました。

塗り直すという修繕方法は、生活道具の実用的な活用方法ではありますが、博物館がめざす文化財の資料保全という点から見れば、あまり選択しない方法である場合もあります。とくに現状保全を目的とした場合には、塗り直すという方法は似ない選択です。

一方で、こうした市民の方々の経験を聞くことで、博物館とは全く異なったモノの保全の仕方



十月十三日にす方
おせんそ様
お父お母様　私　十一月八日
おすうと様
ばば様
兄様
あいのまくら
しろ子十一月母様
上おど十月十五日　みなみ方
十一月二日ケガ
○るさのめ　お父様
とりごへのお父様

写真8　文書とその書き起し

があることに気付くこともできます。その人たちの考え方、問題解決の方法を、作業を通じて記録し続けることによって、地域のなかでそれぞれのモノがどう捉えられ、どう使われてきたのかが分かるようになります。

もう一つの例を紹介しましょう。次の事例は、生活の中で得た知識を資料整理で役立てた例です。これは一枚の文書です（写真８）。写真８には、この文書に書かれた内容の書き起こしをつけました。文書としてみるならば、書かれた内容が理解しにくいことがわかると思います。

内容をみると、「おせんそ様」と書いてあるので、ここは先祖を意味するだろうとか、「お父お母様」と書いてあるから、書いた本人かその関係者の両親のことが書いてあるのだろうとかいうことは想像がつきます。また「私」とあり日付があり、方角が書いてあることは分かるのですが、全体として、何を意味した文書なのかが明確ではありません。

ところが資料登録の作業中に、市民の方が「これはカミサマアソバセという年中行事で使った紙だ」と判断しました。カミサマアソバセとは、地域でオカミサマ（巫女）と呼ばれているシャーマンを呼んできて、その人に家の先祖と生きている人たちとの会話を仲介してもらうことによって、先祖たちが何を気にしているのかを聞こうとする小正月（旧の一月

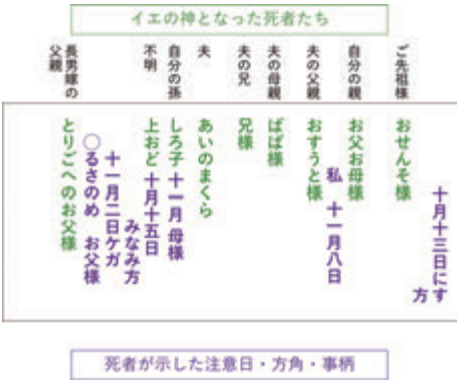


図４　文書の読み解き

十五日）に執り行う年中行事です。その方は、このメモをみて、特徴的な言葉を発見してカミサマアソバセという年中行事のなかで、シャーマンが言ったことを書き留めたものだろうと想像しました。

そこで、私は所有者の尾形さんと奥さんにも文書を示して、由来を尋ねました。すると、奥さんがこれはカミサマアソバセのときに書かれたものではないだろうという見解を出しました。奥さんが違うと判断した理由は、日付が合わないことでした。カミサマアソバセは小正月の年中行事ですが、この文書に書かれた日付は十月、十一月です。カミサマアソバセは、年の後半のような遠い将来のことを具体的に言うことはないので、カミサマアソバセのときに書かれたものではないだろうということだったのです。

カミサマアソバセのメモではないと結論づけた奥さんは、自分が結婚して小々汐に来たあとに経験したことや義両親、村の人びとから聞かされたことを頼りに、義祖母についての記憶を辿ってメモの意味を読み解こうとしました。そこで話題になったのは、戦時中の義祖母の習慣です。

戦時中、尾形家の跡取りたちは、軍人として満州や台湾に派遣されており、娘も嫁いだ先の夫とともに台湾に住むなど、家族の多くが地域から離れていました。そうした状況に、義祖母は家族の無事を案じて、オカミサマに自分の家族や家の将来をみてもらうことに一生懸命になったのだそうです。そして、筆跡や背景情報などから、この文書が義祖母によって書かれたものであり、自分でオカミサマに頼んでみてもらった結果だろうという話になりました。

作業に携わる方や尾形さんの奥さんの情報をもとにこの文書を読み解くと、文書の意味が明ら

かになっていきます。文書の上の段に書いてあるのは、亡くなってイエの神、仏になった人びとです（図４）。また文書の下の段に書いてある紫色で示したのは、イエの神となった死者たちが示した注意すべき人、注意を要する日にち、注意するべき方角、事柄です。ですから、例えばご先祖様は、十月一三日に西の方角に注意しろと言っているということです。

この文書は、始めは行間が等間隔ですが、後ろになると不規則になります。その理由を推測すると、オカミサマにみてもらう行為がどのようなものであるかが浮びあがってきます。行間が等間隔の部分は、おそらく予め義祖母がオカミサマに問うてもらいたい死者を列挙したものです。しかし、オカミサマは、依頼主が望んだ死者だけをおろしてくるわけではありません。予定していた人は答えにおりてくれず、代わりに別の人が出たいと言って出てくることがあるのだそうです。この文書で不規則な行間隔で書かれた部分には、予定にない人が出てきて慌てて書いた経緯が表れているのだろうというのが、この文書をみた人びとの出した見立てです。こうした読み解きは、地域の人びとが自分も実際に経験したことがあるからこそ、可能になるものだと言えます。

こういう文書は単なる所有者やその関係者だけの話では終わらず、さらに作業している人たちの記憶の話にも広がっていきます。オカミサマの話を書き取ったメモをみて、作業している人たちは、今、困ったことがあると、特定の寺に行って占ってもらうようになっているという話をしました。現在では、この地域のオカミサマは震災のあと、最後の方が亡くなってしまい、後継者がいなくなってしまいました。その代わりというのではありませんが、自分が判断しづらいことが起きると、現在は寺に相談に行くのだそうです。たとえば、病院の退院日をいつにするか、同

じ日付でも午前にするか午後にするかは、人によっては占ってもらうべき事柄になっており、病院もそうした選択を許容する文化が地域にあります。

あるいは自分が病気をして医者が手術をすると言ったが、その手術を本当に受けていいかどうか心配だという場合も占ってもらうべき対象になります。また東日本大震災のあと、海岸線にあった多くの集落が高台移転をすることになりましたが、災害前に住んでいた土地を更地に戻す際、トイレを埋めるために宮司などに祈祷をしてもらって土地を鎮めてもらわないといけないという話も出てきました。

こうした事柄の一つ一つは個人の他愛ない経験かもしれません。しかし作業をする市民の方々や生活資料の所有者がお互いに記憶を語り合うことで、参加者が世代間を越えて互いに経験を共有し、地域に関する知識を蓄積していくことになりました。それを私たちは映像や調査ノートなどで記録してきました。

こうした市民の方々の話を記録してみると、モノは多様な経験を語るきっかけになっていることが分かりました。そしてその経験も、たとえば写真で話題となるような、ある特定の瞬間に起きた事柄に限定されるのではなく、モノをめぐって起きたいくつもの事柄についての記憶が思い起こされていくことが分かりました。そしてそうした話のやりとりによって、参加者は地域の文化の多様性にも気付くようになりました。同時に、災害前の経験を語ることは、災害経験を克服するきっかけともなっていました。

文化財レスキューに参加した市民の方々は、文化財に興味はありましたが、本来は地域の文化

について知ろうという目的で来たわけではありませんでした。しかし結果的に、参加者は地域の文化に対して興味をもつようになり、知識も深まっていきました。

6　市民参加のレスキュー活動の課題

これまでの経緯を踏まえると、最初にお話したように、市民が参加する文化財レスキューは、結果的にですが、その過程自体が市民とともに地域文化を再発見し、深めていく活動であったと言えます。

しかしこの気仙沼での活動は、いくつかの大きな課題を抱えています。一つは、多くの市民をいかに巻き込むかという課題です。私たちの活動は、固定したメンバーのみが関わってきました。気仙沼市の事業の一つに位置付けていただき、私たちは尾形家の生活資料を気仙沼の生活を振り返る上で活用できる公の性格をもった資料に育てていくことをめざしてきました。

しかし救った生活資料は個人所蔵のものであり、プライバシーに関わる情報を多く含んでいます。個人のプライバシーを守るには、守秘義務を課す必要があり、誰もが気楽に参加できる事業にはしにくい状況にあります。地域が共有する資料にしていくには、プライバシーの問題をどう解決するか、どこまで公開可能かを見極めることが必要ですが、現在も地域に住む人びとについての資料であることから、すべてを公開することには困難を伴います。

一般の市民と情報を共有する方法として、展示や映像、ワークショップなどが考えられます。

そうした活動を積み重ねて、知識を共有していくという手法を続けていくことが必要なのだと思いますが、市民参加をどうデザインしていくかはなお課題が残ります。

もう一つは、資料を利用し続けることについての課題です。どうやったら、市民が資料を触り続けることができるかは、大きな問題です。というのも、現在の体制では、シルバー人材センターが雇った人びとが資料整理を担当していて、報酬が支払われることによって継続的かつ一定の水準を保って作業が続けられています。しかし報酬が払われるということは、資金源があるということですが、資金が無くなってしまえば、活動自体が終ってしまうのです。

これまでみてきたように、この活動では市民の方々が資料を触り続けることで、過去を振り返り、地域の文化に対する知識を蓄積してきました。しかし活動が終われば、当然、人びとが資料と触れ合う時間がなくなります。この報告ではモノが人びとの記憶を呼び起こすきっかけになることを話したわけですが、資料を触る機会が無くなれば、資料と人との関わりが切れてしまいます。

すると現在の体制のもとでは、モノと人の縁の切れ目とともに、人びとの記憶へのアクセスの機会も無くなってしまうことになりかねません。つまり、せっかく集め、時間をかけて意味付けてきた資料は、保管場所を埋めているだけのかさ張る物体になってしまい、将来的にはゴミと認識されることになってしまうかもしれません。したがって、市民が継続的にモノと関わることのできる仕組みを構築することが課題です。

最後に、ここでお見せすることはできませんが、これまで話題にしてきた作業のなかで見聞き

し映像に記録した事柄を一つの動画にまとめて、六十三分の「モノ語る人びと―津波被災地・気仙沼から」という映像を制作しました。機会があれば、おみせできたらと思っています。さいごは宣伝になりましたが、これで私の話を終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

報告5
「福島第一原子力発電所事故と地域歴史資料の保全・継承」

西村　慎太郎（国文学研究資料館　准教授）

はじめに

ただ今ご紹介にあずかりました、西村慎太郎と申します。どうぞよろしくお願いいたします。「福島第一原子力発電所事故と地域歴史資料の保全・継承」と題してお話しさせていただきたいと思います（掲載した図は図11を除いてシンポジウム当日に用いたパワーポイントによる）。

今回の私の報告ですが、人間文化研究機構のプロジェクトあるいは私が勤めている国文学研究資料館のプロジェクトの話と、私が代表理事を務めておりますＮＰＯ法人歴史資料継承機構じゃんぴんとしての活動を詳しくお話しできたらと思っております。

具体的には、まず本報告の前提として人類史上未曾有の人災である福島第一原子力発電所事故の現在の状況に関するお話をさせていただきます。

そして、当該地域における歴史資料救出、このシンポジウムでも文化財レスキューの話が出ましたが、まさにそういった歴史資料の救出・保全、その先を目指す実践例について、ふたつの事

例をお話しさせていただきたいと思います。

まず自己紹介ですが、西村慎太郎、先ほどお話しさせていただきました人間文化研究機構国文学研究資料館に勤めさせていただいております。専門は、歴史学の中でもいわゆる江戸時代などを中心とした日本近世史をやっております。それ以外にも地域の歴史資料の保全、アーカイブズ学をやっております。

早速ですがお話の方を進めていきたいと思います。

1　福島第一原子力発電所周辺の現状

まずは福島第一原子力発電所周辺の現状について。福島第一原子力発電所事故に関してはご承知の方も多いかと思います。二〇一一年三月十一日午後二時四十六分、マグニチュード九.〇の東日本大震災の発生の直後にこの原発の電源が落ちてしまって、全く制御ができない状態になってしまった。それを受けて同日の午後七時三分に、当時の内閣総理大

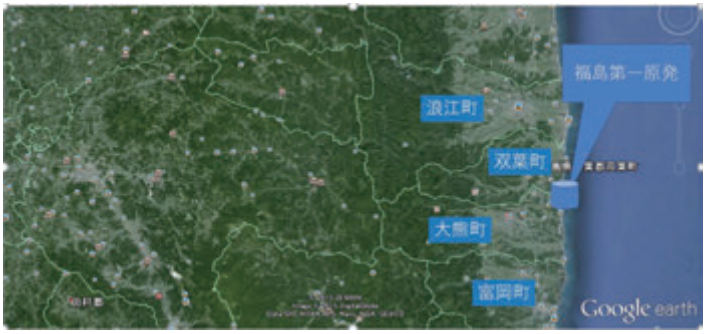


図１　福島県浜通り

臣・菅直人氏によって、原子力緊急事態宣言が発表されております。原子の緊急事態宣言は現在も解消されていません。そして、翌三月十二日午後三時三十六分に、原子力発電所の一号機の建屋が吹っ飛んでしまう、爆発してしまう最悪の事故が発生してしまいました。図1は福島県浜通り地域、福島第一原子力発電所の地図です。大熊町・双葉町の境のところに福島第一原子力発電所があります。第二原発はもっと南の大熊町と富岡町との境に位置しております。

今回は時間も限られているので、現在双葉町両竹地区で進めている活動ひとつと、双葉町北側の浪江町請戸地区で行った活動ひとつをご紹介したいと思います。

原子力災害に遭ったこの地域の避難状況を確認しておきましょう。図2は経済産業省・福島県などのホームページからも見ることができる「避難指示区域の概念図」です。ピンク・緑で色分けされていますが、要するに実線で囲われた部分が帰還困難区域・居住制限区域・避難指示解除準備区域と呼ばれるものです。二〇一七年四月段階で三七〇㎢、福島県全体の二一七％の面積が避難指示区域に該当します。これはピンと来ないかと思うので、もうちょっと分かりやすい事例

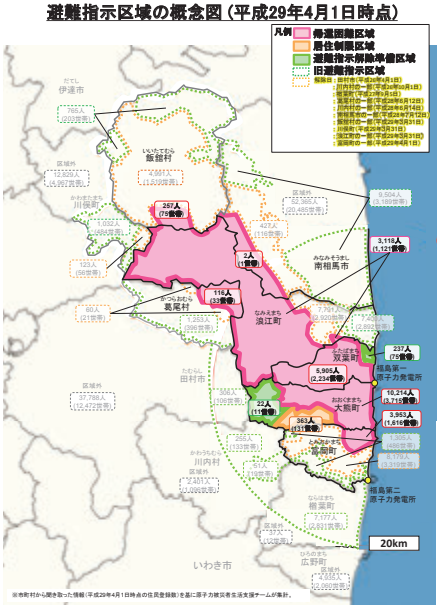


図２　避難指示区域の概念図

で言うと、今回東京でお話ししているので東京都区域で考えると、二十三区の五九．七％の面積だとご理解ください。

ただし帰還困難区域でなく旧避難指示区域、もう既に人が戻れる場所であっても、行政権力側が防災集団移転促進事業を進めているため、住民が戻れない地域がかなりあります。今回のシンポジウムで、事例としてお話しさせていただく浪江町請戸地区は、まさにこの防災集団移転促進事業の地域のために、立ち入ることはできるのですが人は住めない、そういう状況になっております。

2　当該地域における歴史資料保全の実践例　―浪江町請戸地区―

ここでは浪江町請戸地区で実践した事例を紹介します。図３は「福島県における復興祈念公園基本構想参考資料」に付けられた鳥瞰図でして、上の円が浪江町請戸地区、下の円が双葉町両竹地区にだいたい該当致します。

請戸地区は、今回のシンポジウム当日の原子力規制委員会発表の放射線モニタリング情報では0.051μSv/hでした。では、この浪江町請戸はどういう地域か、少し歴史的なお話をさせ

図３　福島県における復興祈念公園基本構想参考資料

ていただきます。請戸という地域は現在の浪江町の東の端にある港町で、江戸時代においてはいわゆる船の寄港地の一つです。そして明治以降、近代になるとカツオ漁やカツオ節生産が盛んな地域でした。

ただ東日本大震災の津波により、請戸地区の全ての建物が全壊流出してしまっております。また原発事故の影響により、避難指示解除準備区域ということで人の立ち入りが制限されました。これは現在解除されているので、われわれも普通に、特に何も届けも出さずに入ることができております。ただし防災集団移転促進事業の地区に指定されているために、人が住むことができない環境になっております。図4は二〇一八年三月に撮影しました町の中心部です。海岸の方は大規模な堤防建設が進められています。空いている空間はどうなっているかというと、それ以外の場所は堤防を造るための資材置き場になってしまっています。図5のような感じです。かなり無機質な状況になっていて、あっちこっちに避難されている地元の方がたとお話ししてい

図4　請戸地区

図5　請戸地区の資材置き場

て、もう地元に戻っても何もないのだと、かなり諦めモードでいらっしゃるのが、非常に印象的でした。図６は請戸小学校です。三月十一日の東日本大震災で津波が来る直前まで、ここには児童が七十七名残っていました。いざ津波が来そうだというので、中にいる教師の方がたが、校内の避難場所では津波を避けられない恐れがあると機転を利かせて、二km先にある大平山というこの山まで来て逃げて、難を逃れました。

先ほどお話ししたとおり、この請戸地区は全戸全壊流出しております。請戸地区に残っていた歴史資料、例えば建築物や仏像、あるいは神社や寺、石造物、当然古文書などもですが、そういったあらゆるものが流出・散逸してしまいました。

そのため、自分たちの地域の歴史を何とかして残すことができないだろうかということで、地元の方がたが率先して『大字誌ふるさと請戸』という本の出版を計画しました。

ただ、自分たちだけではどうしても歴史の部分などを書くことができないというので、請戸地区の人びとから、双葉町両竹出身で当時東北大学大学院生として歴史学を専攻していた泉田邦彦さんに『大字誌ふるさと請戸』の歴史編の執筆を依頼されました。

さらに泉田さんが中心となって歴史編の執筆者を検討し、古代編に松下正和さん（神戸大学准教授）、中世編に泉田邦彦さん（石巻市教育委員会）、近世編に天野真志さん（国立歴史民俗博物

図6　請戸小学校

館准教授）、請戸港編に井上拓巳さん（さいたま市立博物館学芸員）近現代編に筆者がたずさわることとなりました。『大字誌ふるさと請戸』は二〇一八年四月に刊行し、請戸地区全戸に頒布することとなりました。

この歴史編の執筆に関して注意した点が幾つかあります。

第一に、ひとつの時代に関して長く書くのではなく、二万字という、ある程度字数を決めましょうという点。

第二に、請戸地区の人びとは故郷に戻って生活することができないので、将来、もともと請戸出身の方々の子や孫たちが中学生になったら読めるような内容にしましょうという点。

第三に、単に中学生が読むからといって簡単に書くのではなくて、当然ながらこの地域の歴史の面白さ、好奇心を担保するような形の記述の平易化をしようと。

第四に、地元の方々と一緒に作るわけですので、聞き取り調査などをやることによって、歴史編の記述を補完しようという点です。

この執筆に関わっての調査・研究を、人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」における国文学研究資料館ユニッ

図7　シンポジウム「福島県浜通りの歴史と文化の継承」

ト「人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的研究」の中でも展開しており、その成果として二〇一八年十月十三日にシンポジウム「福島県浜通りの歴史と文化の継承　－『大字誌ふるさと請戸』という方法－」を仙台で行いました。当日は請戸区あるいは浪江町の方々が二十数名、それ以外も含めると一四〇名の方に仙台にお集まりいただき、地元の歴史を、さまざまな地元の方々の意見なども取り入れながら一緒に議論させていただきました（図７）。

３　当該地域における歴史資料保全の実践例―双葉町両竹―

次に双葉町両竹地区での実践例を提示します。両竹地区についてはすでに掲げた図３をご覧ください。請戸地区の南側にあるのが両竹地区です。この両竹という地区、図３に点線で囲われている部分がありますが、ここの部分が復興祈念公園です。すなわち、両竹地区のほぼ半分が復興祈念公園によってなくなってしまいます。

さらに南に描かれているのが中間貯蔵施設の予定地です。すなわち、放射性廃棄物を投棄する場所がここに設定されています。この地域の歴史資料の救出・保全から、その先を目指すことを考えようという話をさせていただきたいと思います。なお、両竹地区は、今回のシンポジウム当日の原子力規制委員会発表の放射線モニタリング情報では0.090μSv/hでした。この両竹地区に関する歴史ですが、古代には、稲荷迫古墳という古墳が築かれています。ペトログリフ、いわゆる、岩などに彫刻で人物や動物などが古墳内部に描かれています。また、摩崖仏も残されており、

これは双葉町指定文化財です。中世段階ですと城郭があり、近世には大規模な寺院がありました。東日本大震災に伴う津波で甚大な被害をうけ、原子力災害によって立ち入りが制限されており、二〇一三年五月二十八以降は避難指示解除準備区域となっています。そして震災復興祈念公園の建設予定地になっています。

どういう地域か、写真でご覧ください。中世城郭・両竹館跡があるところから南を見たものです(図8)。図8正面の円で囲ったところが福島第一原子力発電所の五号機か六号機かの煙突です。こちらは東日本大震災の時、震度六弱だったので、震災直後、古い建物、例えば鎮守である諏訪神社などは図9のように倒壊してしまっています。すでに別のところでも報告させて頂き、ブックレット『新しい地域文化研究の可能性を求めて　Vol.5　地域歴史資料救出の先へ』の中の拙稿「救出した歴史資料の射程」でも述べましたが、もともと両竹地区に関しては、当該地域の相

図8　両竹館から南側を眺める

図9　諏訪神社

馬藩在郷給人として活躍した泉田家に遺されていた歴史資料の救出・保全、調査、そしてアーカイブズ学として目録編成を目指しました。それに関して、少しご紹介させていただきたいと思います。歴史資料情報の資源化という話なのですが、こちらのシンポジウムでさせていただいている研究プロジェクトの前段階として、二〇一二年度から二〇一四年度にかけて、人間文化研究機構連携研究で「大規模災害と人間文化研究」という研究プロジェクトがありました。その中で、私は国文学研究資料館の研究ユニットとして、「大震災後における文書資料の保全と活用に関する研究」をやらせていただきました。それに関する成果は木部暢子さん編の出版物『災害に学ぶ』（勉誠出版、二〇一五年）で、拙稿「救出した歴史資料から見る歴史の再発見」を執筆し、その中で今日お話ししている両竹地区に関する歴史資料の保全のことを書かせていただいております。

この時の研究を進展させて、現在でも既述の「人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的研究」で両竹地区のことをアーカイブズ学的観点から進めているのですが、ただもうちょっと別の角度のことも必要かなと思い立ちました。それはどういうことかというと、人々の生活空間の上に復興祈念公園が建設される、そうすると、景観も含めて当該地域の歴史が失われてしまう、破壊されてしまう、その問題をどのように自分の中で、研究者として考えるべきなのか。これは研究プロジェクトとはまた別に考えなければいけないと思い、自分がやっているＮＰＯ法人の中で何かできないかなと思い、地元の方々と相談して、「双葉町両竹の歴史と遺産を後世に!!　出版物を同地区の全戸に配りたい」という朝日新聞社でやっているクラウドファンディングで資金を募集いたしました（図10）。

当初は二〇二〇年に双葉町両竹の歴史・文化を後世に遺す本の出版を考えていたのですが、地元から反響が多くて、もうちょっと具体的に面白い活動ができるのではないかと思い、活動の見直しをしました。

一点目が、刊行開始を二〇一九年に前倒しをして、とにかく早い方がいいだろうと。復興祈念公園に合わせて二〇二〇年にやろうかと思ったのですが、それよりも前にやって、復興祈念公園の是非ということも考えなければいけないと。

二点目が、ブックレットを一年一冊で十冊作って継続していこうではないかという点。継続することによって、次世代に歴史・文化の継承ができると考えたためです。

三点目、本を作るだけではなく、もっと地元の方々とコミュニケーションを取れる場をつくろうと思いまして、現在、双葉町のポータルサイトで「もろたけ歴史通信」というものを月二回配信しております。そういうことをやって地元の方々とコミュニケーションを取っています(図11)。

活動としては、もともと二〇一七年十月から、支援金の募集の最終日までにかけて、毎日この両竹地区に関するコラムを執筆して、それを活動報告という形でネットに公開しました。これは現在でも見ることができるので、ご興味がある方は平仮名で「もろたけ　じゃんぴん」と検索し

図10　クラウドファンディングによる両竹地区での実践

て頂きたいと思います（https://a-port.asahi.com/projects/morotake-jumping/）。

そして目標額六十六万円を考えていたのですが、最終的にはさまざまな方々から、八十四万六〇〇〇円のご支援を頂きました。

おわりに

時間になりましたので最後、締めにいきたいと思います。三点お話しして、最後、締めにしたいと思います。

まず、やはり歴史資料救出・保全の先にどのような地域貢献を目指すかというのは、歴史研究者として考えていかなければいけないだろうという点が一点。

二点目は反省点です。本当にクラウドファンディングというやり方で良かったのだろうかということの是非は、やはり当然あります。特に、今回私がやっているのはＮＰＯですが、さまざまな公的機関、収蔵機関ではクラウドファンディングが最良ではなく、文化行政とその経費の中で議論する必要があります。とりわけ、現在考えている点で言うと、新自由主義的な文化財保護法の改悪という部分の片棒を担いでしまったのかなと、真摯な反省を持っているところです。

三点目。やはり復興祈念公園、あるいは中間貯蔵施設によって破壊される地域の歴史と記憶と

図11　もろたけ歴史通信vol.18

いうものを、この後どうやって継承していけばいいのだろうかというのは、まだまだ考えて追求している部分です。研究者としての歴史実践が、今まさに続いているとご理解いただければと思います。

以上、長くなりましたが、これでおしまいにしたいと思います。どうもありがとうございました。

総合討論
「市民とともに地域文化を活用する」

コーディネーター：黄　貞燕（国立台北芸術大学博物館　助教授（報告当時））
　　日髙　真吾（国立民族学博物館　准教授）

パネリスト：
　　呂　怡屏（総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻）
　　邱　君妮（総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻）
　　原田　走一郎（長崎大学　准教授）
　　葉山　茂（人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター　研究員／国立歴史民俗博物館　特任助教）
　　西村　慎太郎（国文学研究資料館　准教授）

（日髙） 皆さん、こんにちは。これからパネルディスカッションを進めていきたいと思います。今回コーディネーターをさせていただきます、国立民族学博物館の日髙と言います。よろしくお願いします。それと台北芸術大学の黄先生にも登壇をお願いしております。黄先生からは、先ほどのパネルストの皆さんの報告についてコメントと質問をしてもらおうと思います。

今日は、呂先生の台湾における博物館の歩み、特に市民と協同した博物館の展開について講演を頂きました。日本と似ている動きも

あるのですが、やはり台湾独特の動き、特に市民がとても博物館を上手に使うと言いますか、しっかりと博物館にアプローチをかけながら運営していく様子というのは、日本の博物館と地域との関係性とまた違った動きだったりもして、とても興味深い、ご講演でした。どうもありがとうございました。

その後、総研大の学生さん二人の方に、台湾の事例を報告していただきました。日本語を上手に操って発表していたと思いますが、どうでしょう。うまく発表できていたと思われたら、拍手をいただけると（笑）。

―　拍手　―

（日高）　ありがとうございます。私自身、彼女たちとの付き合いも古いのですが、来日した時の日本語の語学力からすると、このような場で、しかも日本語で、プレゼンができるようになっていることが、一人の教員としてちょっとうれしく、またドキドキしながら聞いていたのですけれど、しっかりできて良かったと思います。

呂さんからは、シラヤ族という事例をもとに、自分たちの民族アイデンティティを自己回復していくために、博物館を積極的に利用しながら活動を展開していることをご紹介いただきました。

次に邱さんからは、大渓という町において、町ごと博物館という形で、博物館を一つの拠点としながら、市民が積極的に自分たちの歴史を振り返り、それをいろいろな人に見てもらう。そのような活動を紹介していただいたかと思います。

続きまして日本の例ということで、原田さん、葉山さん、西村さんにそれぞれご発表いただきました。原田さんからは、方言、今日は椎葉村というところを扱っていただきました。実は私、椎葉村の生まれで、三歳ぐらいまで椎葉にある母方の実家にいました。やはり自分の地元がこういう形で紹介されるのをとても誇らしく感じながら聞いていたのですが、言葉というものが、その地域住民にとって、もう一回自分たちの住んでいるところに愛着を持たせる役割があるのだというお話でした。そのようなことを聞きますと、やはり

地域文化を表象するものとしての言葉の意義というものがとてもよく理解できるなと思いながらお話を伺っておりました。

続きまして葉山さんからは、気仙沼という東日本大震災の被災地域の一つだったところの、尾形家という個の歴史について、市民と協同しながら再度掘り起こしていくということが報告されました。そして、その掘り起こし過程の中で、実は協同している市民の人たちそれぞれの知識、記憶、技術を活用しながら、地域史の新しい展開が生み出されていくというご発表を頂いたと思います。

そして西村さんからは、福島原発という、東日本大震災の中でも、ただの津波被災ではない二次被害の被災地の復興過程で失われてしまう地域、加えてその地域の歴史までも失ってしまうことが懸念される地域に対して、歴史学という観点からどのようなアプローチができるのかということで、西村さん自身がクラウドファンディングを活用しながら、その地域の歴史を掘り起こすことの意味と意義についてお話しいただいたかと思います。

みなさんの報告の概要としては、こういう形で進んできたわけなのですが、今日は「地域文化の活用術」という一つの大きなテーマを設定しています。この活用術について、今日は研究者という立場にある人たちが、どのように関われるのかということについて、明らかにしたいと思います。

まず西村さん、葉山さん、原田さんの順番でお話しいただきたいと思います。

われわれは、地域文化、地域の歴史なりを研究するときに、自分たちの好奇心あるいは研究目的というものがあります。今日、報告いただいたような、地域住民の人たちと連動

しながら、あるいはその成果を共有しながらという意識は、最近の動きとして盛んになってきていると思います。このような活動を展開する中で、研究者として地域とどのように付き合おうかというときに、どういう点を注意しているのか、あるいは気を付けているのかなどについて、ご紹介いただきたいと思います。つまり、研究者が地域と向き合う際、どのような心積もりで向き合っていくのかということについて、お話しいただきたいなと思います。

邱さんと呂さんは、まだそういう意味では実践するというよりは、三人の先生方のような活動を研究して、その意味を探り出そうとしている立場かと思うのですが、三人の先生の話を聞いて、私はこう思うなということについて、コメントをもらえたらなと思います。では西村さんからお願いします。

（西村） 西村です。研究者がどのように地域と向き合うかという点に関して、福島での活動以外も含めて、考えているところを一つだけ述べさせていただきますと、やはり地域顕彰のような方向にはいかないようにしたいと思っております。

例えば、僕は今、伊豆半島のでも活動を行っているのですが、さまざまな負の遺産を持っているところもあるのです。その負の遺産をなしにして、この地域はこんなにいいところですよというのを共有すればいいのかというと、それは違います。当然ナイーブな問題もあるので、言い方に気を付けるなどはあるかもしれませんけれども。

僕が活動しているところは鉱山労働の問題がありました。今、アジア太平洋戦争以前あるいは戦中の徴用工の問題が盛んですが、当時は朝鮮人の方が来て、かなり過酷な労働を

強いていたということです。このことは、地元の方々にとっては結構隠したい負の歴史としてあるのですが、資料保存をやっておりますと、当然そういった資料は出てきます。僕の場合、このような負の遺産の話というのも地元の方々と共有しながら、やはりお国自慢みたいなことにはならないようにしているという点かなと思います。

（日高） ありがとうございます。文化というと、割とポジティブに、明るいところばかりを着目してしまいがちなのですが、暗い部分、負の部分も絶対共存している、あるいは内包している部分もあるかと思います。西村さんからは、研究者としてこのような点、暗の部分、負の部分について配慮しながら関わっていくということをご指摘いただきました。この点は、地域文化を考える、あるいは活用する上では、大きなポイントになると思います。

では続いて葉山さんお願いします。

（葉山） 私は、東日本大震災の後、気仙沼に入ったその日に失敗したと思ったことがありました。というのは、意識的な問題ですが、文化財を救ってあげて地域の文化を残してあげるという立場を一瞬取りかけたということです。

ところが現場に行ってみると、地域の人たちは自分たちの世界を持っているし、自分たちの生活をこれからも続けていくのだという意志を持っていることに気付きました。

フィールドワークの基本として、相手の立場と同じところに立つというのはずっと言われていたわけなのですが、そこでそれを再認識して、やはり私たちは教えてもらう側だなと理解したということがありました。

ですから、地域の人たちと同じ立場になるべく立てるように関係性をつくっていくということと、それから自分たちにとって都合のいい情報だけを引き出さないような環境をつくれるかということが重要だと思います。私としては、今そこを頑張っているというか、そういう環境づくりをしています。

（日高） ありがとうございます。今日、基調講演の呂先生の話の中で、これからの博物館の運営について、博物館と市民が協働していく。この場合の協働というのは、協力をしながら目的を同じにして進んでいくという協働だと思います。そういうポイントを今、葉山さんは明らかにしたと思います。研究者と市民が地域文化の活用について考えるときに、研究者はたまに勘違いして上から目線で「こうあるべきだ」のようなことを言ってしまうのですが、やはりそうではないのだということだと思います。われわれ研究者が地域と関わり合うときの姿勢、その心構えとして、とても大事なことをお話しいただいたと思います。ありがとうございます。

では次、原田さんお願いします。

（原田） 原田です。私が専門にしているのは方言の研究ですので、当然地域住民の方との関わりなしには研究することができません。その研究の世界でよく言われるのは、「調査に行きなさい」と。当たり前です。そうでないと研究できないからです。「でも、そこの人の生活の邪魔にならない範囲でやりなさいね」ということは、私が学生の頃などから口を酸っぱくして言われたことです。このようなスタンスは、私が常に思っていることです。

方言の調査というのは、向こうからしたら、

先ほどの報告のようないい感情を生み出したりするかもしれませんが、やはりほとんど時間の無駄なのですよね。自分が既に知っていることをわれわれに教えてくださるわけですから。それをわざわざその方はやってくださっているのだということを常に意識しながらやるということが、大事ではないかなと私は思います。

それと同時に、やはり葉山さんがさっきおっしゃっていたように、人間関係を築いていくというのもとても重要ではないかなと思います。そのためには、短期的なコミットメントではなくて、長期的な関わりが大事なのではないかなと思っています。

私は実は、今日は椎葉村の話をしましたが、メインのフィールドは沖縄県でして、人間関係を築くためにはいろいろなもの、例えば自分の肝臓などを犠牲にしながら人間関係を築いていく必要があったりするのですが、そういったものも必要なのではないかなと考えております。

（日高）　やはり、地域との信頼関係というこ

となのだと思いますね。実際、椎葉村というところはとても閉鎖的なところで、よくここまで原田さんに話をしたなと感心して聞いていたのです。

少しずつ地域住民との関係性を構築していく、それは時間がとてもかかることなのだと思うのですが、その時間を惜しまない、そういう姿勢が地域との信頼関係を生んでいくのだと思います。これはまさに、人文科学が最も得意としている部分だと思います。このような姿勢も、地域文化を私たち研究者が見つめ直して、何かそこから見いだしていくことを考える上で重要な姿勢だと思います。

では次に邱さん、これまでの話を聞いていて、どうでしょうか。

(邱) 本当にフィールドに入ったばかりで、研究者としてはちょっと、まだ言えないとは思いますけれども。

まず西村先生からのご発表ですごく気になったのは、クラウドファンディングです。博物館の運営側としては、継続的に地域住民と活動するための一つの方法ではないかなと、今日はヒントを頂きました。

そして、さっき見せたいものと見せたくないものという過去の歴史があるとおっしゃいましたが、自分がこれまで調査してきて、確かに見せたいことをいっぱい教えていただきました。でも、地域住民が見せたくないところを私はこれまでまだ気が付いていないので、そこをどうやって見つけていくかとか、見通していくとか、それが今後、研究を行うときは、気を付けていきたいところです。

そして葉山先生がおっしゃっていたように、地域住民は自分の世界があります。ですので、どうやってよそ者の私がそこに入って

いくか。実は私が研究を行うときは、地域住民だけではなくて、学芸員も地域住民の一部として見ています。そして学芸員や館長、店の人など、本当に全員自分の世界があるので、どうやってその中に入ってお話を聞くかを考えています。それと同時に、彼らの人間関係を自分が邪魔にならないようにすごく気を遣っています。例えば、学芸員さんに誰かを紹介してもらって話をしてもらうときは、どうすれば自分が聞きたいことだけではなくて、本当にこの人自身が話したいものを話してもらえるのか、それはすごく注意しています。本当に葉山先生がおっしゃっているとおりです。常に彼ら自身の世界を尊重しながら、自分が立ち入れるところを考えているというのは、実は今まさに悩んでいるところです。

そして原田先生が言っていた、調査することは当たり前だけれども、地域に入って皆さんと一緒に生活しながら本当に邪魔にならないでということについてです。本当に、まだ自分が地域に入ったばかりで、皆さんと同じ目線で活動を一緒に見るとか、そういう関係もまだできていないので、私は今のところ自分がすごく邪魔な存在だと常に思っているのです。だからこれからどうやって乗り越えていくかについて、三人の先生方の発表を聞いて、すごくいろいろとヒントをもらいました。これからは今までの自身の活動について反省しつつ、努力したいと思います。

〈日高〉　ありがとうございます。他者であるということ、このことについて私たちは、常に意識しておかないといけないのかなと思います。その中で、どのように地域の人たちの信頼を勝ち得て、いろいろな話を引き出してくるか、これは研究者として一つ大きなポイ

ントになると思います。実は、それはいまだにわれわれも同じ課題を抱えているところでもあるかと思います。

では次、呂さんお願いします。

（呂怡屏） 先ほど先生方の話したことを聞いて、自分の調査を振り返って反省した上で、二点感想をみなさんとシェアしたいです。

まずは研究者の姿勢です。今日発表しましたように、現地住民は博物館の資料を使い、これから再製していく活動などを行っています。けれど例えば、私が読んだ博物館の収蔵品に関する資料から現地住民たちの動きを見たときには、「このような使い方で、大丈夫でしょうか」という感覚が現れる時もあります。けれども、八十年前か一〇〇年前にその地域に収集された物から、ものの元の所有者の子孫はどのように自分の祖先とつながっていくのか、どのように表現するのか、そういうことを研究者や、よそ者である私は、まずは見守っていくべきではないかと改めて反省しています。

そして、もう一つは地域との信頼関係のお話と関係があります。調査地の文化復興運動のリーダーであるD氏は、G集落の出身の人で、文化復興運動と政治的な動きに参加してもう二十年くらいの年月が経っています。そのため、私は調査研究を進めるうえで、これまでずっとお世話になっています。このように勉強をさせてもらっているD氏や地域の人たちに、自分はどのように村の人たちに貢献できるのかを考えています。例えば、私が今日本に勉強しているので、日本にあるシラヤ族の資料の情報を村にフィードバックするということが考えられます。あるいは村の人がもし「日本に行って調査したい」などの希望

がでたときには、どのように架け橋としての役割を果たせるのか。そういうこともこれからは考えたいと思います。

（日高） ありがとうございます。いろいろな文化活動が行われる中、地域の人たちが主体となって、さまざまな変化を生み出していく。そのときに生じている事象について、これで大丈夫かなとか、これでいいのかな、そういったことがありながらも、そこを無責任に評論しないという姿勢が一つ大事なことであるということですね。そして、そこでせっかく勉強させてもらっているのであれば、どのようにその成果を地域の人たちに還元していくのか、共有していくのか、そういう姿勢が必要なのだということもお話しいただきました。これも一つ大きなポイントになるのではないかなと思います。

それでは黄先生、今までの話を聞きながら、こういう地域文化の活用に関する台湾と日本の比較なども含めてコメントいただきながら、お話をしていただければと思います。よろしくお願いします。

（黄） 皆さん、こんにちは。私は台北芸術大学から参りました黄と申します。これから発表言語のバランスを考え、中国語で話させていただきます。

島国である台湾は、これまでずっと国際交流を重要に、そして熱心に行ってきました。ただ、その中でも日本との交流や対話は、台湾にとって特に重要であり、意義のあるものでした。というのも、この一〇〇年来の時間の中で、台湾と日本は大変緊密な関係がありましたし、社会の発展についても似たようなところがたくさんありましたし、またお互い

違うところもあることにも気付いてきました。

今回のシンポジウムは、地域文化、市民、そして社会の発展がテーマです。私は台湾であれ日本であれ、やはり一九八〇年代から、これらが社会発展の中で大変重要なキーワードであったと考えていますし、さまざまな政策も双方図ってきたと思います。日本の政策は台湾にも大きな影響を与えています。例えば、まちづくりプロジェクト、町並み保存という言葉は、同じような言葉が台湾でもあります。また、地方文化館と日本の博物館類似施設という考え方は似ています。そして、地方創生プロジェクトは、日本ではかなり大きな発展を見せていると思います。そして日本でそのようなプロジェクトが出ると、すぐに台湾でも同様のプロジェクトが出てきます。日本から学んでいるということです。そして台湾の地方の振興政策は、日本を追ってきたと言えると思います。そのため、台湾と日本の間の交流は、政府、学術、民間、共にとても活発に行われています。

十年前から私は大変光栄なことに、国立民

族学博物館と交流がありまして、毎年共同の研修を行っています。このような十年間の協力関係の中で、大変面白いことを見つけています。それは、地域文化と社会の発展というテーマは、この日本と台湾にとっての意義が若干違うということです。同じテーマなのですが、意義付けは違うのです。ですので、博物館を研究している人、あるいは市民の参加する目的やその方法もまた違うのです。

今日、呂先生の発表を通じて皆さんお分かりになったかと思います。最も長い戒厳令の時代を通じて、重要な国の政策を見いだすことができました。しかし、地方の人にとって、地方の歴史や文化は、過去の政治的な立場や、あるいは政治的な歴史、国家のアイデンティティを乗り越えて、自分たちの身近な歴史、家族の歴史、またコミュニティの歴史を見つめ直す大変重要な課題として浮き上がってきたのです。つまり、地方の文化、地域の文化というものは、台湾の社会、文化の価値観、あるいは世界、ライフスタイルと大変緊密な関係にあるということです。

同時に、市民の活動がさまざまなコンテンツや応用がなされることで、個人の感情やストーリーに基づく小さなストーリーのみに集約しかねないということが起きています。ですので、活動を展開している各団体や人々がそれぞれの行動力や主張を持ち、さまざまな在りようになってきています。

しかし、さまざまな限界があるため、影響を受けているということもあります。つまり、長期的な累積ができないということになっています。先ほど呂先生の話にも、四〇〇以上の地方の博物館があると紹介がありましたが、学芸員がいないのです。学芸員などが参加しているプロジェクトが大変少ないという

ことです。

また、邱さんの話からもありました大渓のミュージアムですが、ここは新たな地方の博物館となっていますけれども、ミュージアムの共に学び、市民と共に学ぶというコンセプトは、私もこの博物館の準備に関わっていたので知っていますが、日本の地域の博物館がその発展の基盤となっています。ですので、大渓で行っている市民と共に学ぶというコンセプトは、日本語で言うと共同で学ぶという方法論だと思うのです。これは日本の市民参加型博物館の台湾版と言えるかと思います。そして、このような活動は博物館の推進力が必要となります。博物館の協力を通じて、たくさん分散していた個人の記憶、あるいは家族の記憶を一カ所に集め、それを一つの大渓の歴史として収集することが求められるかと思います。このような役割を果たしていくということは、大渓の博物館が発展していくために重要な基盤となると思います。

台湾は、地方文化と社会の発展を通じ、住民を主体とすることが大変重要視しています。しかし、地方文化とは何でしょうか、地方の歴史とは何でしょうか。このことを考える際には、新たな研究の論述あるいは方法論が必要なのではないか、より細かく解釈していく必要があるのではないかと思っています。

今日は、日本の三人の発表をお聞きして、言語学、民俗学、あるいは歴史学のさまざまな角度からより細かな論述や解釈の可能性を見いだしました。ですので、私は今後引き続き日本と交流を続けて、日本の博物館、大学などの研究を学び、皆さんのパワーを結び付けていきたい。そして地方文化の歴史をより深く、より細かく解釈する、このようなこと

がより良い社会の発展につながるようにと願っています。

ここ数年、日本と交流し、学習してきました。この経験を通じて、私が感じていることは日本と台湾の違う点です。日本と台湾に違いがあるということからも、今後引き続き協力をしていきたいと、そのように考えている次第です。

（日高） ありがとうございます。今の黄先生の話のポイントで、日本と大きく違うのが、台湾の複雑な歴史背景、あるいは社会背景ですね。そういったものが、台湾の人たちが自分たちの文化をきちんと知りたい、自分たちは何者なのかを知りたい、そういう原動力につながっているということが一つあるのではないかなと思います。これはまた日本とは違った地域文化の活用モデルなのかなと思います。

ただし、日本の場合、災害という問題が起こった場合に、やはり自分たちが一体何者なのかということについて、地域への帰属意識の強さが出てくるということがあります。災害で自分たちの文化に対してもう一度見つめるという機運が生み出されてくるところは、台湾で地域文化に関心がもたれるきっかけと、共通してくる部分があると思いながら、話を伺っていました。

そういう中で、この中でも今住民と研究者という形で話をしていますが、もう一つ大きなポイントが行政との関わりをどう考えるのかというところです。日本では行政が、地域文化を活性化していく、あるいは活用していくことが地域の創生につながっていくということで、いろいろな補助事業も展開しているのですが、あまりうまくいっていないという

率直な感想も持っています。

原田さんや葉山さん、西村さんは、行政とどう向き合っているのでしょうか。もしかすると研究者というのは、地域と行政の間の仲介者にもならなければいけないのかもしれないのですが、そういったところでの役割がどこにあるのかということについて伺えたらと思います。

原田さんからお願いしていいですか。

（原田） 方言は、行政的には相当見放されていて、もうちょっと温かい目を向けてくださってもいいのではないかなという正直な感想を、まず言っておきます。

そうですね、行政と付き合う上で注意しなければならない点としては、どうしても自治体の単位で動かざるを得なくなるのです。そうすると、その中にあるバリエーションがどうしても隠れてしまう場合があります。その点にわれわれは繊細に注意を払う必要があるだろうと。そういった意味で貢献しなければならないと考えています。

（日高） とても大事なことですね。地域というのは、別に今の地方自治体の行政区割りの中で生まれているものではなく、もっと広い空間的な範囲を示すものです。そういったところで、抜け落ちてしまう部分がある。多分それは行政の一つの限界でもあるのかもしれないですね。今の自治体の区分けの中で縛られてしまう点において、研究者はそこを飛び越えることが可能な存在でもあるかと思うので、とても重要な視点かなと思います。

では葉山さん、お願いします。

（葉山） 一つは、自治体市の区分というか記

述の仕方が、形が決まっていて、それから外れるような興味がなかなか取り挙げられないということは実際あるのかなと思っています。そうなると、地域の住民と私たちが関わる中で「あ、これは面白い」ということを、はしゃいではいけないのでしょうけれど、面白がって行政に伝えていくことは、一つ大事な役割だと思っています。それを面白い面白いと言っているうちに「じゃあ地域住民と会を持って、市民講座やってみますか」という話になってくるので、そういう機会をいかにつくり出すか。私たちが面白いと思っていて、地域の人たちが当たり前と思っていることを再発見して、それを皆さんに知らせていき、そこからまた新しい知見をお互いにつくっていくというような、その仲介を私たちはできるのかなと思っています。

（日高）　ありがとうございます。この点は、今日原田さんの報告で紹介された地域文化の活用の際の内的志向と外的志向の活動とかぶるところがありますね。意外と「地域文化って大事だね。大事なのだけども、それって何なの？」と話したときに、「何だろう？」と

地域の人も悩んでしまう。それは多分、地域文化の埋没化がある種現れていることなのだろうなと思います。その原因の一つとして、行政区画の問題というのは、大きな影響があるのだろうなと思います。そういう行政区画を乗り越えて、その埋没化された地域文化にもう一回焦点を当てて掘り起こしていく。これは研究の一番の醍醐味（だいごみ）の部分でもあるのかなと思います。そういったところを一つ一つ丁寧に掘り起こすことによって、本来持っていたその地域の豊かな文化が、改めてその地域の人たちに提示できる、そういう活動にもつながっていくのかなと思います。

では西村さんお願いします。

（西村） 今、原田さん、葉山さんや日高さんがまとめられた点などは、まさにもっともですので、別の角度から少しお話ししようかなと思います。

自治体といっても一枚岩ではなく、現場で働いている、例えば文化財担当の方や教育委員会の方々は結構熱心なのだけれども、別の

部局は「それがどうお金になるの」とか「どう観光に生かせるの」とか、そういう発想にどうしてもなりがちだったりします。やはり温度差というか、見ている方向が違う場合があるので、そこは気を付けなければと思っております。

また最近の動向ですと、先ほど文化財保護法の問題に最後に少しだけ触れさせていただきましたが、文化財課が教育委員会から分かれ、いわゆる首長部局、市町村長の部局の方についていって、どうにかして文化財を使っていこうという発想でやらざるを得ない自治体もあります。しかしそれで成功している自治体を僕は知らないので、やはり原点に立ち返っていく必要があると思いますし、現場の文化財を担っている人たちに立ち返っていく必要があるのではないかと思っております。

あと、もう一点。先ほどの自治体の話ですが、今自分がやっている両竹のクラウドファンディングの事例、実は両竹という地区は浪江町と双葉町にまたがっている地域で、僕がやっているのは双葉町の話なのですが、浪江側にも両竹という地区があります。そこは復興記念公園に完全につぶされるところなのです、かろうじて昔の景観や地域が残っている場所があるのです。今回の僕のクラウドファンディングでは、浪江の方々との協力がまだうまくいっていないために、現段階ではどうしても双葉だけになってしまっている。先ほどお話しいただいた、自治体ごとに分けられない地域というものがあるというのは、まさにそのとおりだなと思って聞いておりました。とても大きな課題だと思っております。

（日高）　文化財保護法改正の問題というのはたくさんあるのですが、文化財保護法は元々

保存しながらしっかり活用していきましょうというのがその根っこにあると思います。これは文化財保護の改正の中においても、その姿勢は変わりません。それが、活用がことさら強調され、保存の視点を忘れてしまっているのではないのかと感じるが故に、いろいろな批判が出てきているのだと思います。一方で、文化財保護法等の問題等について、その地域の人たちに言ってもなかなか難しいところがあります。今回の文化財保護法の改正では、特に地域文化ということに着目した改正の視点もあったかと思いますので、そういったところをきちんと研究者が分析し、理解して、地域の人たちと地域文化の活用を考えていくということは、今後の大事な課題なのかなと思います。

では、邱さんと呂さん。今度は呂さんからいきましょうか。台湾の行政と地域文化の関わりということについて、情報提供していただけますか。

（呂怡屏） そうですね。シラヤ族のG集落の文化復興の主導者であるD氏と行政側との連携については、およそ一九九〇年代半ばに台湾のまちづくりプロジェクトが始まった頃からのです。D氏もまちづくりの補助金を申請して、民族的な環境づくりを行いました。その成果は、今もまだ村のあちこちでも見られます。

実際には、台湾の文化資産保護法の中には、原住民をめぐる専門の章はまだできていません。今はまだそれについて検討しています。だから、文化復興のリーダーのD氏はいろいろなところを回りました。例えばシラヤ国家風景区の行政機構に行って、シラヤ族コミュニティの文化保存や観光発展のための補助金

を申請しました。もしくは、台南市の文化局へ向かい、文化行政の担当者と交渉をして、理解を得たうえで、文化復興や文化伝承の予算が申請できるようになりました。

特に先ほど紹介した夜祭という年中行事に、中央政府に属する文化部からの補助金があります。それはD氏などの集落の有識者たちが二〇一〇年前後から努力をして、文化資産保護法の「国指定民俗」項目を申請し、二〇一三年に指定されたから、毎年申請できる文化を伝承するための予算があるわけです。

だから、D氏は文化復興運動を行う最初の十年間には、数多くの困難を直面しました。シラヤ族は原住民という身分はまだ持っていないけれども、また、文化資産保護法には原住民のための章もまだ立てられてないけれども、その十年間の努力が報われました。その成果として、行政と良い関係を築いて、この五、六年の間に、文化復興と文化伝承という事業が徐々にできるようになってきました。

（日高）　ありがとうございます。これは明確な目標をきちんと決めているからできること

なのだと思います。まさに実践していこうとする人が、行政に対して積極的にアプローチをかけて情報収集し、自分たちがこうしたいという一つの目的を達成するために行政と付き合って、頑張っているシラヤ族の一つの事例の話を頂いたと思います。

では邱さん、お願いします。

(邱) 皆さまの話を聞いて、二点気が付いたことがあります。

まず、振り返ってこの大渓博物館という事例を見てみると、過去二十年間のまちづくり、振興策などは、文化行政側から始まったことです。もちろん時代の流れのなかでの社会変容と関係していることでもありますが、博物館を設置することは、間違いなく行政が関わっています。

今、この事例を見ると、本当に地域住民や、すごく熱意を持って現場にいる学芸員さんが、文化行政から与えられる資源をどうやって活用して、自分がやりたいことをやっていくかを考えています。しかし、行政は、やはり文化観光に向けていろいろやりたいので、

それに合わせなければいけないという悩みが生じています。それがすごく研究者として面白いところと思います。ただ、本当にその場にいる皆さんがどうやって乗り越えていくかは一つの課題です。

そして三人の先生方も言っていた自治体という単位、その話を聞いたときに、呂先生がおっしゃっていたことを思い出しました。大渓博物館は、そもそもの地理範囲や大渓という定義を、改めて考える必要があるではないでしょうか。例えば、全市民が学芸員になるというのは、本当にあそこの行政区分に住民票登録している九万人を地域住民と言うのか、あるいは昔からあそこの山に住んでいる先住民族の人も、大渓地域の地域住民とみなすのか、いろいろと考え方を改めて検討する必要があるという話を一回伺ったことがあります。私は、市の博物館ということで、ずっと市の行政範囲で考えて調査してきましたが、そうではなく、行政区画とは切り分けて、本当の地域の歴史や文化をもう一度考える必要があるのではないかと思うようになりました。

（日高） ありがとうございます。地域文化一つとっても、多様な考えを持った人が、いろいろな思いで、それが必ずしも一致していない思いの中で、何かをしようとする。そのような立場の人たちの中には、行政というもう一つの要素もあって、そこはそこでまた一つ何か違った考えというか、地域文化の活用のことは考えているのだけれども、違った方向性を見いだしているということがあります。そこをどう埋めていくかということは、話し合うしかないなと思います。

割と多いのは、市民や研究者からは「行政

はどうせ何もしてくれない」とか、行政からは「行政としての目的と違うからこれは駄目です」という表現をする場合があって、とても悲しい現実を見せつけられたりします。しかし、ここであきらめてお互いがそっぽを向くのではなく、お互いが粘り強く付き合っていくということが一つのポイントであり、今の邱さんの一つの思いとして、そのような時間のかけ方ということもとても重要なポイントになってくるのかなと思いながら聞いていました。

では黄先生の方から、黄先生の立場で、台湾の中での地域文化と行政との関わりでの課題や現状について、教えていただけたらと思います。

（黄） 戒厳令の後に人々が声を出し、国の文化政策を変えるための非常に重要なスタートとなりました。しかしながら、これが本当にできたのでしょうか。この十数年以来、これが討論されてきました。

政策の主張は、人々に声を出してくださいということで、国の補助金を受けるためのいろいろな条件やルールができました。それをクリアしなければならないのです。この市民からの要請に基づくボトムアップは大事なことでしょう。しかしながら、経費の補助がかえって制約になっているという部分があります。これが、ここ十数年討論されてきた問題でした。

ここ数年、学術界の中で反省を行っています。学術はどのようにして市民を主体とする運動の中に入っていくかということです。学術の公共性をどのように発揮するかという問題です。学者は、学者の身分でこれに関わるのではなく、専門の知識と能力で、市民の立

場で関連の活動に参加するという反省が行われ、それが注目され始めています。この点を考慮するとすれば、文化、行政、それと関係する政策と補助というのは、さらに積極的な思考を招くでしょう。国のお金と予算、そして政策が、共に協力する大きな事業の中で、公共性のある役割を果たすことができるかということです。

そして重要な点としては、例えば早い時期において、国の文化政策では、まちづくりや地方の文化館を造るということでしたが、その目的は、市民が活動する拠点をつくる、機会をつくるということでした。しかしながら、現在台湾では少しずつ変化が出てきています。この文化政策の目標が、いかにしてみんなに文化の資源というもの、それを解釈する資料を集め、それを公開するかということに変わってきているのです。例えば全国的な文化財の調査もあります。そしてこの文化、記憶のデータベースを作ろうということです。創造性もありまし、文化の蓄積を行うということはとても重要なことで、これから注意すべき方向だと思っています。

（日高） ありがとうございます。あらためて市民や研究者が行政と連携して、地域文化を発見していく作業を進めていかなければいけないという話を頂いたかと思います。

あっという間に時間が過ぎてしまって、もうそろそろ終わらないといけませんので、まとめに入りたいと思います。今日の話のテーマである地域文化の活用術ということについて、どういうポイントがあったのかということをこのパネルディスカッションを振り返りながら、整理したいと思います。

パネルディスカッションでは最初に、研究

者という立場から、地域文化をどう見るかという話をしていったのですが、研究者と市民の協同がとても重要なのだということが明らかになったと思います。それと同時に、二つ目の話題として取り上げた行政との関わりの中で、確かにいろいろと難しい問題はありますが、粘り強く連携しながら、恐らくここでは市民や研究者や行政、そのほかいろいろな立場の人々が介在すると思うのですが、それぞれが双方向性の関係性をきちんと築きながら考えていかなければ、この地域文化の活用体制は生まれないと思いました。その中で、今日の呂先生の話などを聞いて、改めて思ったことなのですが、博物館の可能性というものはまだまだ残っているなと思いました。博物館が拠点となって、いろいろな分野の人々と連携させていく、その中継地になり得る存在としての博物館の可能性を感じたところです。

そしてもう一つ、地域文化の活用を考えていくときに、今日皆さんの話を聞いていて共通していたことは、まず地域に住んでいる住民の人たちが自分たちのアイデンティティを

再確認するために、その地域文化を見つめているところからスタートしているということがあったと思います。そこから観光資源化していくとか、教育資源化していくとか、さまざまな資源化の動きが展開していくのだというお話を頂いたかと思います。逆に言うと、このプロセスを無視していきなり観光資源化などのステップにいってしまうと、多分それは持続可能なものにはならないのだろうと思います。この点は、まさに今日、原田さんが示された地域文化活用における内的志向、外的志向という考え方によく表れていたと思いました。まず内的志向、つまり地域住民のなかで地域文化をきちんと理解し、そこから外的志向の中で資源化を展開していく。これが持続可能な地域文化を活用術になるのではないかということで、今日のシンポジウムでの一つの結論になるのではないかと思います。

ちょうど時間も参りましたので、これでディスカッションを終わりたいと思います。今日は長い時間、どうもありがとうございました。

閉会挨拶

木部　暢子（国立国語研究所　教授／副所長）

国立国語研究所の木部と言います。今日は長い時間、ご一緒にこのシンポジウムに参加してくださいまして、どうもありがとうございました。

私は国立国語研究所というところに所属しておりますので、普段は言語、方言の調査をやっています。今日の発表で言うと、原田走一郎さんと一緒に椎葉村に行って、辞典作りをやっています。

今日は、台湾から呂先生をお迎えして、とても有意義なお話を伺うことができました。特に、台湾の文化財の保全と博物館の歴史を知ることができましたし、それからまちづくりプロジェクト、地域文化博物館プロジェクトのお話をお伺いして、私たちにとって大変刺激的でした。というのは、地域の住民が参加して、地域の方たちが主体的に博物館を運営するという活動が非常に根付いているのだなということを、今日初めて知ったからです。地域の方たちを巻き込んでということは、私どもも常に考えているわけですが、やはり時間がかかりまして、日本ではまだうまくいくところまではいっていません。

ただ、今日の原田さんの発表も、葉山さんの発表も、それから西村さんの発表も、いずれもやはり地域の人たちと一緒に同じ立ち位置に立って研究、それから資料の保全を続けていくことを

目指しているという報告をされました。先ほど黄先生のお話でも、似ているところと違うところとあるというお話がありました。確かにそのとおりで、お互いの長所や欠点、出てきた問題点などについて今後継続して、協力して意見交換しながら、同じ文化財というものを巡って、共通の話題でお互いにこれからも高め合っていけたらと、今日は思いました。本当にどうもありがとうございました。

それともう一つ今日思いましたのは、国際シンポジウムというと、とかく欧米とのコラボレーションをイメージしがちです。特に最近の日本の傾向で、国際シンポジウムというと大抵英語でやるとか、アメリカやヨーロッパの方が来るとか、そういうイメージが大きいのですが、やはり私たちはアジアの一員として、お隣の国や近い国ともっと協力しなければいけないということを、今日は非常に感じました。これは本当に根本ですね。ですから私たちは、もっと近くの方々と協働することを考えなければいけないと非常に強く思いました。

呂先生、どうもありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。そして会場の方々も今日は本当に長い時間ありがとうございました。今後とも人間文化研究機構のシンポジウムを、どうぞよろしくお願いいたします。

呂理政（Lu, Li-Cheng）
所　　属：国立台湾歴史博物館 元館長
専 門 分 野：人類学、博物館学
研究テーマ：博物館展示、台灣の民間信仰
著　　書：『伝統信仰と現代社会』（稲郷出版社、1993年）、『東アジアの遺跡博物館』（国立台湾史前文化準備室、1993年）、『博物館展示の伝統と展望』（南天書局、1999年）、『早期台湾歴史文献研究書目』（南天書局、2006年）『経緯福爾摩沙－16～19世紀西洋が描いた台湾地図』

呂怡屏（Lu, Yi-ping）
所　　属：総合研究大学院大学 文化科学研究科地域文化学専攻
専 門 分 野：文化人類学、博物館人類学
研究テーマ：文化復興による民族アイデンティティの形成
著　　書：「自然災害後博物館的社會參與――以小林平埔族群文物館為例」『歴史臺灣』13：P53-P80（2017年）、「台湾における災害展示と民族アイデンティティとの関係」『総研大文化科学研究』13：P239-P255（2017年）

邱君妮（Chiu, Chun-ni）
所　　属：総合研究大学院大学 文化科学研究科比較文化学専攻
専 門 分 野：博物館学
研究テーマ：都市博物館と文化遺産及びコミュニティ振興の研究
著　　書："MUSEUMS AND THEIR COMMUNITIES-What About Us? Looking inside city museums" in CAMOC-REVIEW 2018 No.2, p27-30.（2018年）、"Presenting Immigrant Culture at the National Museum of Ethnology, Japan" in CAMOC-REVIEW 2017 No.1, p9-12（2017年）

原田走一郎（はらだ　そういちろう）
所　　属：長崎大学 多文化社会学部 准教授
専 門 分 野：記述言語学
研究テーマ：日本語と琉球諸語の方言の研究。主なフィールドは沖縄県八重山郡竹富町黒島。
著　　書：「南琉球八重山黒島方言における二重有声摩擦音」（『日本語の研究』、2016年）『椎葉村方言語彙集―栂尾・不土野編―』（国立国語研究所、2017年）、『石川県白峰調査報告書』（国立国語研究所、2018年）

葉山茂（はやま　しげる）
所　　属：人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター 研究員／国立歴史民俗博物館 特任助教（併任）
専 門 分 野：民俗学・生態人類学
研究テーマ：漁村における資源利用の研究・地域における文化財の保全と活用
著　　書：「現代日本漁業誌―海と共に生きる人々の七十年」（昭和堂 2013年）、編著に展示図録「特集展示―人間文化研究機構連携展示 東日本大震災と気仙沼の生活文化（図録と活動報告）」（国立歴史民俗博物館 2013年）

西村慎太郎（にしむら　しんたろう）
所　　属：国文学研究資料館 准教授
専 門 分 野：日本近世史、アーカイブズ学
研究テーマ：近世身分制、地域歴史資料の保全
著　　作：『近世朝廷社会と地下官人』（吉川弘文館、2008年）、『宮中のシェフ、鶴をさばく』（吉川弘文館、2012年）、『生実藩』（現代書館、2017年）

黄貞燕（Huang, Jan-Yen）
所　　属：国立台北芸術大学博物館研究科 准教授
専 門 分 野：博物館学、無形文化遺産学
研究テーマ：博物館と地域社会、無形文化遺産と博物館
著　　書：『日本と韓国の無形文化財制度』（国立伝統芸術総處準備室、2008年）、『民俗・民族文化の収集と博物館』（国立台湾芸術大学、2011）、『子供のための展示』（遠足文化、2013年）、『無形文化資産制度の理論及びそのシステンムに関する研究』（文化部文化資産局、2013年）、『無形文化資産の関連する法律の研究』（文化部文化資産局、2016年）

日髙真吾（ひだか　しんご）
所　　属：国立民族学博物館 人類基礎部門研究部 准教授
専 門 分 野：保存科学
研究テーマ：民俗文化財の保存修復技術の開発、博物館の資料保存
著　　作：『女乗物―その発生経緯と装飾性』（東海大学出版会　2008年）、『博物館への挑戦－何がどこまでできたのか』（三好企画　2008年　園田直子と共編）、『記憶をつなぐ―津波災害と文化遺産』（千里文化財団　2012年）、『災害と文化財―ある文化財科学者の視点から』（千里文化財団　2015年）

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」ブックレット

新しい地域文化研究の可能性を求めて Vol. 8
市民とともに地域を学ぶ－日本と台湾にみる地域文化の活用術

発行日／2019年３月25日
著　者／黄貞燕・日髙真吾・呂怡屏・邱君妮・原田走一郎・葉山茂・西村慎太郎
編　者／麻生玲子・葉山茂
発　行／人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」
印　刷／株式会社　弘　文　社

新しい地域文化研究の可能性を求めて

Vol.8 2019年3月

■市民とともに地域を学ぶ
　ー日本と台湾にみる地域文化の活用術

呂　理政
　博物館、住民参加と地域振興
　—台湾における四十年間の観察と考察

呂　怡屏
　台湾における平埔族の博物館資源活用と文化表象の構築
　—シラヤ族を事例として

邱　君妮
　地域住民とともに『文化遺産』をつくり出す：
　台湾大溪博物館の事例報告

原田走一郎
　言語学者を活用する
　—宮崎県椎葉村と国語研の取り組み—

葉山　茂
　被災した家財の資料化作業を通して地域をみつめる
　—宮城県気仙沼市の事例から

西村慎太郎
　福島第一原子力発電所事故と地域歴史資料の保全・継承

総合討論
　黄　貞燕・日髙真吾・呂　怡屏・邱　君妮・
　原田走一郎・葉山　茂・西村慎太郎

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」